この理不尽な世界をのらくらと

焼き鯖

【注意事項】

このＰＤＦファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にＰＤＦ化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でＰＤＦファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

妖怪の山に、とある男がいた。面倒ごとや理不尽が大嫌いで、その日その時をのらりくらりと生きれればそれでいいと思っている男であった。しかし、裏では鞍馬天狗に命じられて、悪者を殺す始末屋だった……

これは、鞍馬天狗直属の始末屋「沼田駒次郎」と、その周囲の人間による物語である。

時にバトルし、時に恋をする、彼の明日は一体どっちだ……

目　次

彼はただ、のらくらと生きたいだけである ―――――― 1
彼女は、このシュールな出会いに驚きを隠せないようである ―――――― 20
彼は、自分の事を話すのが嫌いらしい 42
どうやら彼は今日、厄日らしい ―― 66
彼女は、彼の強さに驚きを隠せないようだ。 ―――――― 89
彼は兎角、トラブルに巻き込まれる 125

彼はただ、のらくらと生きたいだけである

澄み切った夜空をふと見上げると、綺麗な弧を描いた三日月が、既に眠ってしまった地上を優しく照らしているのが見える。人里、いや幻想郷から見えるこの三日月も勿論綺麗だが、妖怪の山から見えるこの月は別格だ。空に近い分、この綺麗な月はとりわけ美しく輝いて見える。

つくづく思うのだが、こんなに素晴らしい原風景を見せてくれる世界というのは、本当に理不尽極まりない。助けた相手に手を噛まれる事もあるし、ありもしない濡れ衣を着せられる事もある。この世は弱肉強食で、強い者は威張り散らし、弱い者は怯えながら暮らしていくハメになる。嫌な仕事を押し付けられるのが、その最たる例だ。決定権のない奴を徹底的に追い詰める。あれ程理不尽な事はない。だが、その理不尽にみんな従っている。なんと世知辛い世の中なのだろうか。

「……なんてこと言ったって、今は誰も聞いちゃくれねぇしなぁ……」

溜め息と共にそう呟き、俺はナイトの駒をbの五に置く。象牙のような白と、オニキ

スのような黒に彩られたチェック模様がひしめくチェス盤の上には、これまた象牙のように白い駒がそれぞれに配置されていて、今にも敵陣に切り込もうとしている。しかし、相手の敵陣に黒の駒はない。というか、俺の向かいには相手すらいない。空虚な対面先に、ただただ涼しい夜風だけが音を立てて流れ去っているのみである。

もしここに誰か人が来たとしたら、俺は相当の変わり者か命知らずだと思われてしまうに違いない。だって、こんな夜遅く、しかも天狗が巣食う妖怪の山の中腹で、一人で理不尽というものに対してブツブツ文句を言いながらチェスをしてるんだぜ?俺が仕事しに来たと弁明しても、十中八九の人は絶対に信じようとはしない事は目に見えて分かる。

大体この場所にだって、好きで来た訳じゃない。仕事の依頼を引き受けて、そいつが来るのがここだと知らされているから来ただけであって、本来であれば自分の家でゆっくりとチェスの戦術を考えているはずだったのだ。もっと言えば、俺はこんな仕事なんかしたくない。それこそ事務とか、簿記とか、そういう楽でのらりくらりと生きれそうな職業に就きたかった。ところが、なんの因果かこんな面倒で責任重大な役職を、入社してから言い渡された。その時の人事の奴は、「貴方の能力は、この仕事に百パーセントあっていると診断が下されました。頑張ってくださいね」って能天気にほざいた時には、温厚な俺でも流石にキレそうになった。

俺は、今この時をのんべんだらりと生きていければそれでいいのに、何故か世の中はそれを許しちゃくれない。チェスが好きな奴は知り合いには誰もいないし、仕事はアホみたいにキツイし。かの夏目漱石が、草枕の一節を書くのも無理ない気がする……智に働けば角が立つ、情に棹させば流される、意地を通せば窮屈だ。兎角に人の世は住みにくい……改めて呟いてみると、その深さ、重みに感心せざるを得ない。

「……ハハ！」

なんて独りよがりな事を考えていると、向こう側の方からバカみたいな笑い声が聞こえて来た。同時に何人かの足音も聞こえて始める。これでも耳はいい方だ。近場に聞こえて来た音で数と性別位は分けられる。

足音からして、数は二十二、三。それも全員が男。多分、依頼対象の奴らが来たんだろう。このまま来なければ異常なしで報告出来たのになぁ……まぁ仕方ない。取り敢えず準備の確認を……

「……なんだお前。なんでこんな所にいる？」

……しようと思っていたら、相手の方から既に俺の目視できる範囲に近づいていた。後ろの方では、顔や腕に傷や入れ墨だらけのいかつくてむっさい連中が、訝しげに俺の方へ視線を向けている。

最初に話しかけて来た男は、誰よりもガタイが良くて、肩からチラリと桜の花びらが彫られているのが見えた。顔の傷も、他の奴とは比べものにならない程付いているし、筋肉のつき方が尋常じゃない。予め渡されていた写真をみると、ものの見事に人相が一致しているし、恐らくこの男が獲物なのだろう。

「おい、なにだんまりを決め込んでんだよ。質問に答えるのが礼儀ってもんじゃねぇのか？ええ？」

「……密輸業者、椿鬼組筆頭、華山椿（はなやまつばき）だな？」

挑発のような相手の言動を軽くスルーして、俺は立ち上がりながらそう尋ねる。尋ねられた男はやや不服そうに「それがどうした」と返した。よし。一応確証は得られた。後は任務を遂行するだけだ。

「とある方から匿名で依頼されてなぁ。お前、この辺り一帯の草花を荒らし回ってはそ

れを高値で売りさばいていたそうじゃないか。三日月草、だっけ？あれが乱獲されてから、この山では何人もの失業者が出たよ。ただでさえ三日月の晩にしか取れない三日月草が、なんか知らないが各地で全滅してて、それに頼って商売していた天狗は一斉に店仕舞いしたんだとさ。知ってたか？まさか妖怪の山の動植物は、許可がない限り持ち帰り禁止っていう条項を忘れていたわけではないだろう？」

「……だから俺を始末しに来たわけか？」

「流石、密輸業者の頭目は勘が冴えてるねぇ。ご名答……なんだけど」

そこで俺は、一際大きなため息をつきながら項垂れた。その動作に驚いた男達はそれに驚いたようだけど、そんな事気にせずに顔を奴らに向ける。

やっぱり人を殺すのは俺の本意じゃない。だって痛いじゃん？相手も俺も。今まで幾つかこの仕事をこなして来たけど、みんな苦しみながら、死を恐れながら死んでいくの。俺は、死ぬ前の必死に生にしがみつこうとするその形相を見るのが嫌なんだよね。怪我もするから物理的に痛いし、精神も傷つけられるから心理的にも痛いし、二重苦って奴だよ。生き地獄って奴だよ。全くもって理不尽この上ない。

だから、俺は仕事に掛かる前に必ず相手にとある質問をする。

「正直言っていい？俺、お前らの事殺したくないの。一瞬とはいえ痛い思いするしさ。こっちも苦しみながら死んでく人間の顔なんか見たくないわけ。だから、今回限りで密輸から足を洗って、二度と妖怪の山に近づかない事を約束してくれればその時点で見逃してあげる。金輪際俺はお前らの前には現れないし、現れたとしても知らん顔して通り過ぎる。そうすればお互いにウィンウィンだろ？」

この質問をする時、大抵の奴らはみんなキョトンとした顔をする。「何言ってんだこいつ」みたいな感じで。まぁそうだよね。今まで命張っていた奴らだから、こんな素っ頓狂な事言われた事ないだろうし、そんな顔をするのも無理はない。その後奴らが取る行動は二つ。笑いながら俺を馬鹿にして提案を却下するか、無視して口封じしようとするかのどちらかだ。どっちに転んでも俺は殺される事には変わらないんだけどね。

今回のターゲットである華山椿もまた、俺が殺して来た奴らと同じような顔で俺を見つめていた。そして、奴らは前者を取った。

「ハッハハハハ！なんだお前、まさかそれを言うためにおめおめ姿を見せたわけか！馬

鹿だ！正真正銘の馬鹿だ！ハッハハハハ！いいか小僧。お前は一つ勘違いをしてる。この世はな、理不尽で成り立ってんだ。そんな甘いこと言ってられる余裕なんかねぇんだよ。それで誰かが泣きを見ても俺は知らねぇ。その理不尽に抗えなかった奴が悪いんだよ。俺は悪い事をやったなんて思ってもねぇ。むしろそうやって泣き言を言う奴に吐き気を催すぜ。金儲けて何が悪いんだ。三日月草は金になるから採ってるんだよ。悔しかったら先に独占すりゃいいんだ」

成る程。一つだけ分かった事がある。こいつの言ってる事は、ほんのちょびっと、大体三ミリ位は俺の怒りの琴線に触れたと言う事だ。

今まで自分の都合のいいように弁明する輩は数多くいたが、ここまでふてぶてしく居直られるのは初めてだ。何より、こいつは少し理不尽の意味を履き違えている。それだけは俺は許せなかった。早い話が交渉決裂。俺は臨戦態勢を整えた。少しだけ怒っているとはいえ、それでも頭は冷静に。一応いくつか準備はしてあるが、この数なら取り敢えず五つくらいで十分か……

「……おい、何が五つで十分だって？」

おっと、どうやら俺の独り言は丸聞こえだったらしい。目が据わった華山が、でっかい刀を持って俺を睨みつけていた。後ろにいる奴らも全員刀や斧を取り出していて、戦闘準備は万端らしい。

「どうやら分かってないようだな。お前は手ぶらでここにいる時点でもう死んだも同然なんだよ。縄張りを見つけられた以上、生かしておく事は出来ねぇ。下らない提案をする位なら暗殺術の一個でも身につけておくんだったな」

「……あんたらさぁ、恥ずかしくないの？大人数で寄ってたかって一人を嬲り殺そうとするなんてさ。しかも降参の意志まで示してるんだぜ？常識ある大人のする事じゃねえよ」

「知るか。ここに入り込んで来た挙句、俺らをおちょくったお前が悪い」

明らかに侮りの様子を見せながら近づいてくる華山と、それについて行きながら俺が嬲られるのを舌なめずりせんばかりにニヤニヤ待っている部下に、俺は内心溜め息をつく。これで退いてくれればよかったけど、ここまで来たらもう後には戻れない。臨戦態

勢を整えてしまった以上はやるしかないようだ。

「なぁ、もう一度話し合おうぜ?·こんな無意味な嬲り合いなんて誰も望まないし、あんたらにも得がないよ?·今日は一旦帰って、後日またここに来ればいいじゃん。その方が後腐れないし、仕事もスムーズにこなせるだろ?」

怯えてるふりをしながら後ずさり、懐に手を入れる。バレるのを覚悟しての行動だったが、これから行う虐殺プレイを想像しているのか、不審がる様子はない。こいつらが馬鹿で助かった。

「命乞いか?·そんなのを聞き届けてやれる程俺は甘くない。さっきはよくもふざけた事を言ってくれたな。たっぷりお礼をしてやるから覚悟しろよ」

「勘弁してくれよ……俺が悪かったから……さぁ!」

華山の足が俺の間合いに入ったのを見計らって、俺は懐に隠しておいたクナイを四本投げた。刀の鋒が俺に届く位の位置まで相手は肉薄していたが、それは逆に、当てる的

も大きくなるという事。しかも、俺のクナイは毒を塗った特注品だ。相手が油断している事も相待って、今なら確実に当てられる。最悪掠ってもじわじわと殺す事が出来る絶好のチャンスだ……と、普通の人なら思うだろう。普通の人ならば。

　残念ながら俺の投げたクナイは、全て華山の肩の上を大きく通り過ぎ、部下の誰にも掠る事なく、地面の上に正方形を作っただけだった。突然の出来事に彼らも驚いたらしく、しばらく呆然とそれを眺めていた。が、誰かが盛大に吹き出したのを契機にして、最終的には大爆笑の嵐に包まれた。

「ギャハハハハハハハハハハ！こんな至近距離で外すか！ガキですらもっとマシなコントロールするぞ！」

「腹いてぇ！俺初めて見たこんな素人！」

「なんだよ結局張子の虎か！一瞬だけヒヤッとして損したぜ！」

　この羞恥心攻撃を受けながら、俺はなんとか理性を保とうと深く息をする。相変わらず、この理不尽には耐えることが出来なさそうだが、こんな時こそ冷静になれ。大丈夫。

作戦は上手くいってるんだ。落ち着いて相手の様子を伺えば、其処にいずれ勝機が見えてくる。

「さぁて、細やかな抵抗がなされたところで、ショーの始まりと行こうじゃないか。お前ら！最初に何処を切り落として欲しい？先着一名の早い者勝ちだ！おっと、逃げようったってそうはいかねぇぞ。この俺に楯突いたんだ。このまま死なない程度に可愛がってやるから楽しみにしてなぁ！」

勝った。勝利を確信した奴ほど、最期に詰めが甘くなる。

振り向きざまにそう言った華山に、俺は努めて冷静にこう返した。

「じゃあさ、これで負けたらあんた、相当恥ずかしいってことになるよな？」

「……何？」

さぁ、エンドゲームと行こうか。全く気は進まないけど。

「太助!?おい太助!しっかりしろ!」

早速、後ろの方から切迫した声が聞こえてきた。どうやら部下の一人が首か何かを掻き切られて絶命したようだ。心配する声も途中で「かッ……!?」と言う断末魔と共に途切れ、辺りに静寂が立ち込める。

流石におかしいと感じたのか、連中が周りをキョロキョロと見回し始めた。が、まぁ月が出ているとは言えこんな暗闇の中で奴らをしっかり視認しろって方が無理な話だ。予想通り、何人かが叫び声をあげる事もままならないまま地面に倒れ伏していく。

「て……テメェら一体何やってんだ!さっさと見つけて叩き落とし……」

阿鼻叫喚の後ろを向いて華山が怒鳴り散らそうとしたが、振り向いた先にある何かを見て、口を噤んだ。

奴らと俺の視線の先には、暗闇の中でも分かる程大きくて長い太刀を持った大柄な歩兵がいた。見るからに頑丈そうな甲冑に身を包んだそれは、初めは幽霊のようにゆらゆらと揺れているだけだったが、カッと目が光った瞬間、その巨体に似合わない速さで此方に向かって突進してきた。

「な……なんだこいつは!?」

「何ビビってんだ!こっちはやられたとは言えまだ頭数はある!早く仕留めろ!」

華山の怒号に気圧されて、何人もの部下がそいつに突撃するが、山みたいな体格のそいつの前ではどんなに小兵を集めても意味がないらしい。払われ、あしらわれ、吹き飛ばされ、中には運悪く頭がかち割られる奴もいた。それでもなんとか殺そうと、子分たちは必死に抵抗を続けている。

あんな巨体に狙われたらさぞ恐怖なんだろうな。なんて他人事のように思いながら、俺は改めて華山に声をかけた。

「あーあーあー。素直に忠告を聞いてりゃこんな事にはならなかったのにねぇ」

「何ぃ……!」

「怒んなよ。これはあんたが選んだ事なんだぜ?でもまぁ、今ならまだ見逃してやらん

事もない。どうする？」

　既にあいつらの襲撃とあの兵士の襲撃とで、何人か死人が出ている。今聞いてる限りでも、断末魔の声は上がり続けているし、ここら辺が潮時だろう。正直言って、何事もないように装うのも意外と疲れるんだよ。

　しかし、俺の願いもむなしく華山は奇妙な笑い声をあげた。

「……クヒッ……クハハハハハハハハハハハ！誰が降参なんかするか！いいか？ここからすぐ行った中継場にな、仲間ァ百人ほど待機させてあるんだ！今部下の一人を連絡に行かせた！百人もいりゃあこんなデカ物すぐに殺せる！そしたら次はオメェの番だ！もう許さねぇ。肉の一つも残らないように切り刻んで……」

　その時、麓の方角から何かが飛んできた。どうやら鏑矢らしい形状のそれは、綺麗な弧を描きながら俺の足元に突き刺さった。よく見ると、本矧のところに何か紙が巻きついている。

　味方からの援護射撃かと思っていた華山の顔に、若干の不満が浮かんでいたが、それに気づかないふりをして巻かれた紙を取って見る。

……流石、うちの副官は手際がいいね。少し時間がかかったとは言え、人数が人数だからしょうがない。その手腕は褒めないとな。

「……おい、何笑ってんだよ」

ありゃりゃ。どうやら俺は声どころか顔にも出やすいらしい。次の仕事の時には気をつけるようにしよう。本当はやりたくないけど、日銭を稼がなきゃならないからね。

「あぁ、すまんすまん。で、なんだっけ？百人の援軍だっけ？残念だけど、そいつらは来ないよ」

「あぁ!?出まかせ言ってんじゃねぇ！」

「いやいやホントの話。なんか、中継場に入った百人全員が、何者かに襲われて全滅したらしいよ？」

これがその証拠だと言わんばかりに、俺は矢文を華山の方へ向ける。報告書と書かれ

たその紙には、百人全員ともう一人をしっかり始末したという旨がこれ見よがしに書かれていた。

流石にこれでまずい事を悟ったらしい。華山は青い顔をしながら後ずさりを始めた。そこに蓋をするかのように、巨体の甲冑歩兵が行く手を塞いだ。いつの間にか断末魔の悲鳴は収まっており、辺りには全身をクナイで刺されたり、何時ぞやの香霖堂で見たフェイタリティーなゲームのように頭を真っ二つにかち割られた死体が累々として散らばっていた。

「結局ここまで来ちゃったか～。だから言ったじゃん。話し合おうぜってさ」

「な……う、嘘だ！こんなもの、夢だ！ヤクの吸いすぎて見えた幻覚なんだ！」

「残念だけど、これ現実なのよね。臭うだろ？あんたの大切な部下の血の匂いだ。いくら幻覚でも、嗅覚だけは誤魔化せないはずだぜ」

「な、なぁ、悪かった。俺が悪かったよ。さっきは意固地になってすまなかった。だからもう一度取り引きし直してくれ。殺しはしたくないんだろう？」

「今更だよ。あんたは最初の取り引きの時点で断ったじゃないか。その後も、俺は何度も何度も提案したよな？でも、あんたはそれを受けなかった。死ぬ今頃になって命乞いするなんて、虫が良すぎるとは思わないか？」

「だが、お前はさっき……」

「そうだよ。確かに俺は殺しが嫌いだよ。けどな、状況が変わったんだ。ここまで沢山の子分を殺しといて親玉逃したとなれば、鞍馬天狗様に顔向けが出来ねぇ。もう理不尽って言い訳で引き返せない所まで来ちゃったんだよ。俺もお前も」

「く、鞍馬天狗……？て、テメェ！一体何者なんだ！」

鞍馬天狗様の名前を出した途端、華山の顔が更に青くなった。まぁ、無理ないよな。天下の大妖怪だもん。スッゲェ理不尽な事要求するけど。

ていうか、俺自分の名前をこいつらに名乗ってなかったっけ？まぁ冥土の土産に教えておくか。

「あれ？俺自己紹介してなかったっけ？まぁいいや。丁度いいから今名乗るよ」

そこで俺は懐からいくつかチェスの駒を取り出し、空中に向かって放り投げた。

「俺は沼田駒次郎。鞍馬天狗様直属の始末屋さ」

名乗り終えた所で、落ちてくる駒をキャッチする。かっこよく決まったと思っていたけど、どうやらそう思っていたのは俺だけだったらしい。キャッチした時には、すでに華山は頭が四当分に裂かれて死んでいた。自己紹介の最中に甲冑歩兵がぶった切ったに違いない。自分のカッコつけに酔ってその事に気がつかなかった俺はとんだピエロだ。

「はぁ～あ。いつ見ても嫌な顔だ」

苦しみながら死んで行く者の顔はしていないが、明らかに死に対しての恐怖を抱いたまま死んだ者の顔をしている。何度この顔を見ても、慣れないものは慣れないし、自分

の罪悪感は拭えない。

のらりくらりと生きるにはまだまだ遠いな。そう考えながら、俺は各所に配置してあるクナイを拾いにいった。

彼女は、このシュールな出会いに驚きを隠せないようである

「うわぁ……これは酷いものですねぇ……」

部屋の惨劇を見ながら、私は一人そう呟く。山の中継場から異臭がするとの報告を受けて来たけど、これ程までとは思っても見なかった。驚きで、この射命丸文の決め台詞、「あやややや」が出せなかった程に、だ。

早速死体を見聞すると、背中と腕に一輪の大きな椿の刺青。間違いない。これは密輸業を生業とする、椿鬼組の構成員の一人だ。最近は妖怪の山の特産物も取り扱っていたはず。恐らく、夜のうちにこの部屋に入り、潜んでいた何者かと交戦した結果、全滅という憂き目に合わされたと見ていい。

だけど、一体誰が彼らを始末したのでしょう?中にある死体の数は、少なく見積もっても百人前後はいるはず。この数を一人で相手取るには、相当の使い手でも至難の技だ。状況にもよるが、真っ向からの直接戦闘の場合、熟練の技を使う達人よりそこそこ戦えるゴロツキ百人の方が、戦力の点から見て圧倒的に有利な事が多いからである。そ

れに、この部屋には隠れる場所がない。闇に紛れての奇襲戦法なら勝機はあるが、こんなだだっ広いだけで精々奥の押入れしか隠れ場所のないこの部屋で、奇襲戦法なんか出来るわけがない。尚更正面切っての戦闘になる可能性が高い。

窓ガラスが割れていることから、外側からならあるいはとも思ったが、死体の中には手裏剣が刺さっているものもあれば、刀で斬られたものもある。割れた形状からしてこれは弓矢によるもの。いや、狙撃手がいるなら話は別かしら……？

「ちょっと文さん、処理の邪魔するなら出て行って下さいよ」

あやや。考え事をしていたら椛に叱られてしまいました。本来この仕事は哨戒天狗の役割ですが、ネタになりそうな匂いを嗅ぎつけた私が、椛に無理を言って同行させて貰ったのです。

「あはは、申し訳ございません。すぐに私も手伝いますので、そんなに怒らないで下さいよ」

「全くもう……」

振り返って謝ると、椛は呆れた顔をしながらも許してくれました。いやぁ、持つべきものはやはり有能な部下ですねぇ。

「ねぇ、椛。一体誰がこの人数を始末したのでしょう？分かりますか？」

体を真っ二つに斬られた死体を片付けながら、私はこう問いかける。椛は難しそうに「うーん」と唸りながら、私にこう返した。

「分かりません。単独犯にしては手口が鮮やか過ぎるし、この人数を一人で相手取るのは中級の妖怪でもかなりの骨が折れます。二人組だったとしても、中と外で分けるなんて非効率な事、私はやりません。二人組なら、素直に中で白兵戦をやった方が殲滅できる可能性も高いのに」

「そうですよねぇ。私も同じ事を考えていたんですが……」

「ですが、こんな話があります」

おぉ、なんでしょう。俄然興味が湧いてきました。

一旦作業の手を止めて、椛の方に向き直る。この時ばかりは、椛はため息一つつかなかった。

「私も人伝でしか聞いた事がありませんが、この妖怪の山には、それはそれは優秀な始末屋がいるらしいんです」

「始末屋？」

「はい。そいつは忍者や騎兵、果ては大柄な武士を引き連れていて、それらを手足のように動かしては、密輸業者やヤクザ者、ルール違反者を影で殺してきていると言われています。ある人は、始末屋自身の戦闘力も高く、その戦い方は風のようだと語っていました」

成る程。この噂が正しいとしたら、大体の疑問に納得がいく。

二人ではなく、四、五人でこの部屋に待ち伏せていれば、容易かつ確実に相手取れる。

忍者や武士等の戦闘や暗殺のプロフェッショナルがいるのなら、尚の事簡単に始末が可能だ。弓での狙撃にしても、両側から挟み撃ちにすれば集中砲火でなす術がない。

だが、ここでまた一つ、新たな謎が生まれる。人間や妖怪であれば、歩いた時必ず地面に足跡がつく。複数人いるのとすれば、その足跡は無数に残る。なのに、地面についている足跡は、私が見た限りだと一つしかない。空を飛べば足跡はつかないけど、この中継場は周りが木に囲まれていて、飛ぼうとするなら木の枝や葉っぱが必ず落ちるはずなんですよねぇ……

「文さん？　考えるのなら後にしてください」

折角頭がフル回転してきたところなのに、椛の声にまた邪魔された。

「いーじゃないですか。ちょっとくらい思考の海に浸らせてくれても」

口を尖らせながらそう言うと、椛は呆れた顔をしながらため息をついた。

「こっちは人手は十分なんです。はっきり言って手伝ってない文さんは邪魔なんです

よ。なんだったら、仕事もしない管轄外の烏天狗は、部隊長に報告して即刻放り出してしまっても構わないですよ？」

全く、椛は少し固すぎます。もっと柔軟な頭で対応してほしいものですね。

「はいはい分かりましたよ。頭のお固い白狼天狗の椛ちゃんにまた怒られるのは、私も嫌ですからねぇ」

少しだけ嫌味ったらしく言って、また私は作業に戻る。悔しそうに尻尾を振る椛を見て、ちょっとだけ胸がスッとしたのはここだけの話だ。

しかし……始末屋、ですか。

椛の話がもし本当なら、これは大スクープのチャンス。最近の幻想郷は平和ボケしていてこれと言ったネタがなかったですし、ここで一気に購読者数を増やして発刊部数トップの座に駆け上がる事も夢ではない。

だけど、ここまでの情報だけではあくまでも噂程度で止まってしまう。本人に直接会えればいいんですが、恐らく話が一人歩きし過ぎて半分伝説じみた感じになっている。この分ではギャップが大き過ぎて読者をがっかりさせてしまうかもしれない。そもそ

も噂が否定されてしまったら、この話自体がおじゃんだ。どこから切り込んで行けばいいものか……

「……ん？」

首が切断された死体を置き、次の死体を運び込むために戻ろうとした時、履いていた下駄に何かが当たった。小石か何かかと思ったが、それにしては細長いし、妙な形をしている。

拾ってみると、吸い込まれそうな程に黒い……置物？　でしょうか。その割には小さいですし、頭みたいな部分は、何処と無く西洋の神官が被ってそうな帽子みたいで、何かのゲームかで使いそうな感じがします。

確か、何時ぞやのレミリアさんの取材の時にその名前を聞いた気がしますね。なんて言いましたっけ……そうだ。ビショップだ。チェスの駒の一つで、将棋の角行よろしく斜めにしか動けない。

この時のレミリアさんは、紅魔館の人達全員をチェスの駒に見立てていました。自分はキングで、咲夜さんがナイト。ビショップはパチュリーさんで、美鈴さんがルーク。小悪魔さんがポーンでフランさんがクイーン。なんともまあ吸血鬼らしい洒落た答え

でした。

と言うことは、これは紅魔館の人達の仕業……？　いや、高貴な吸血鬼を自称するレミリアさんが、こんな小童共を相手にする筈がない。何より使われてる武器が違う。しかし、あの人は気まぐれだから、戯れにこんな事をしても可笑しくはない。だけど、だからと言ってこんな慣れない武器で戦おうとするかしら……？

そこでふと顔を上げると、足跡の一つが山頂に向かって伸びていることが分かった。確か山頂を通る道の途中には……。

「……椛、死体はこれで全部ですか？」

私は、丁度死体を運んできた椛に声をかけた。

「はい。後は燃やして部隊長に報告すれば完了――」

「すみません。私、急用を思い出しました」

言うが早いか、私は隠していた黒い翼を広げて空に飛び立った。

「ちょっと！　後始末はどうするんですか！」

「貴方達でやっておいて下さ～い！」

まだ下で椛が騒いでいるが、そんな事を気にしている場合ではない。

椿鬼組は密輸を主としていた。であれば妖怪の山に来る理由は一つ。三日月草を取りに来たのだろう。死体は恐らく山の上にもある。だとすると、もっと確実な情報が得られる何かがある筈だ。多分、この後死体の処理が行われると思うし、証拠が消える前に情報を得なければ。

私は、少しだけ飛ぶスピードを速めた。

ーーー

三日月草が咲く場所に行って、良い事と悪い事と、判断がつかない微妙な事の三つと出くわした。

良い事は、私の予想通り大量の死体が転がっていた事。中でも椿鬼組の頭目である華山椿が惨い死に方をしていたのはありがたかった。もし始末屋の方が空振りになったとしても、この死に様を見出しにすれば、噂の存在と絡めて購読者の興味を一気に煽ることができる。

悪い事は、始末屋に関する情報を殆ど得られなかった事。死体を検分してみても、手裏剣や弓が刺さっていない事や、喉を斬られて死んでいるものもある事を除いて有力な情報は無いに等しいと言っていい。確かに、その始末屋が忍者なんかを使っている事の裏付けにはなったが、だからと言って始末屋の存在を確証する手立てにはならない。期待していただけにこれはショックだった。

そして判断がつかない微妙な事というのが……

「スゥー……スゥー……」

華山椿の死体の前にある石の上で寝ている、一人の男の存在だった。

この男、私がここに来た当初からずっと眠りこけている。昨日の夜から寝ているのか、白と黒の市松模様の着物には木の葉が散っており、顔の上には雀が止まっている。幻覚かそのうち起きるだろうと思い、最初は無視し続けていた私だが、全ての死体を調べ終えてもまだ寝ている事に気付いた時には思わず変な顔をしてしまった。ていうか、幻覚なら寝息なんて聞こえる筈がないですもんね。

確かに、ここは昼寝したりピクニックするには絶好のスポット。いい感じに木陰も多く、見晴らしもそこそこいい。だけど、今はそこら中に死体が散らばる酸鼻極まりない殺人現場。そんな状況の中、ここまで安心して昼寝する人は幻想郷のどこを取材してもいない……いや、実際にここにいるわけだからいないと言い切るのは時期尚早でしたけど。

「……うー……ん……」

おおっと、どうやらその男が起きたようですね。ゆっくりと体を起こし、寝ぼけ眼で此方を見ています。

「あややー、起きましたか。おはようございます」

先ずは挨拶をしておきましょう。どんなにこの人が頭のおかしな人でも第一印象は大事ですからね。

「お加減は大丈夫ですか？何分こんな場所で寝ていましたからねぇ。夢見は最悪だったと思うんですが……」

「……」

「それより、なんでこんなところで寝ているんですか？見ての通りここは凄惨な殺人現場ですよ？こんなところで寝るなんて酔狂な方、幻想郷でも貴方くらいだと思うんですけど……」

「……」

「あのー……もしもし？」

「……」

どうしたのでしょう？　先程から私の声など気にも止めず、周りを見回したり着物の懐を弄ったりしている。何かを探しているようにも見えますが、何処と無く私を無視しているようにも見える。これがもし後者の方だったらただじゃおきませんが……

「……はぁぁぁ～……」

な、なんですか!?　急に大きな溜息をついて！　あまりに突然の事だったんだ思わずびくってなっちゃいましたよ！

しかし、これで怯んではいけない。何があったか聞き出さなければ！

「……ど、どうしたんですか？」

恐る恐る尋ねてみると、男の方は暗いテンションのまま答えた。

「……だよ」

「はい？」

「チェスの駒がないんだよぉ～……」

え？　チェスの駒？　一体どう言う事でしょうか？

「昨日、仕事の後始末が終わった後、駒入れてる袋確認したら、何故か一つだけ駒がないんだ。多分片付けてる時に何処かに落としたんだと思うんだが……」

ふむ。どうやらこの人は本当に探し物をしていただけのようですね。私の存在を無視していないだけ良かった良かった……って、チェスの駒？　それってもしかして……

「あのー、そのなくした駒って言うのは、一体なんでしょうか？」

「え？　黒いビショップって駒だけど……」

「それって、もしかしてこれではありませんか？」

そこで先程拾ったものを見せてみると、先程のテンションとは打って変わって、凄い嬉しそうな顔になった。

「え!?　嘘ォ！　あんた、これ一体どこで見つけてきたんだ!?」

「いや、麓の中継場に落ちてましたよ？」

「よかった～。この前香霖堂で入荷してもらったばっかりでさ、なくしたら一週間は待たなきゃいけないんだ。ありがとう！　本当に助かったよ！」

な、なんでしょうこの人。チェスの駒一つでどうしてここまで一喜一憂出来るのでしょうか？　ていうか、仕事？　仕事って一体なんですか。農民でもここまで耕しに来るほど阿呆な人はいないですよ。仮にここに住む妖怪だったとしても、ここを耕すのは禁止のはず。服装からしても、農耕を働き口にしているのではなさそうですし、この人は何者なのでしょう？　妖力は感じますが特に危険な匂いはしないですし、人間だと言

われればそのまま信じてしまいそうです。

「あ、しまった。自己紹介をしてなかったな。俺は沼田駒次郎。妖怪の山に住んでる者だ。よろしく」

「あ……あぁ。えっと……私は射命丸文と申します。文々。新聞（ぶんぶんまるしんぶん）を作っている天狗です」

って、しまった！　相手のペースに乗せられるあまり、ついうっかり普通の挨拶をしてしまったじゃないですか！　ぐぬぬ……この射命丸、一生の不覚です……

「射命丸……あぁ、たまに妖怪の山に捨てられてるあの新聞書いてる人なのか。中身もそこそこ面白いし、発刊者とこんなところで会うなんて光栄だよ」

あや？　この人、私の新聞を読んでいるのですか。なんか、真正面から読んでるとか、面白いとか言われるのは初めてですからちょっと恥ずかしいですね……ん？なんか、今スルーしてはならない事を聞いた気がしますが……まぁ、気分がいいので気にしない事

にしましょう。

……って、そうそう。いい気分になって一番気になっていた事を聞きそびれるところでした。

「ところで……沼田さん」

「んー、駒次郎でいいよ。沼田って苗字、呼びづらい気がするし」

「では、駒次郎さん。どうして貴方はこんなところで寝ていたのですか？　ここ、今は殺人現場になっていて、とても眠れるような状況ではないのですが」

「あぁ、あの時は駒探しで必死だったから、寝床なんて考えてなかったんだ。あそこの石が寝床に丁度よくて……あっ」

そこで駒次郎さんが、何かに気付いたような顔をした後、恐る恐ると言った感じで私に尋ねてきた。

「なぁ、射命丸。今何時だ？」

「へ？　えっと……私が中継場に来たのが八時半でしたから、結構経ってると思います。日の高さ的に十時くらいじゃないですかね」

そう答えると、駒次郎さんは「しまった」と言った感じで頭を抱えた。

「まずい！　仕事の報告をすっかり忘れてた！　早く行かないとあの人にどやされる！　ああでも、この格好のまま行ったら何言われるか……」

どうやら、駒次郎さんの上司というのは相当怖い人らしい。いつの間にか、彼独特のマイペースな雰囲気が消え失せ、あたふたと慌てふためく駒次郎さんの姿がそこにあった。

ふむ、私をここまで翻弄した駒次郎さんが怖がる上司は一体どんな人なのでしょう。ちょっと見たくなってきましたね……そうだ。

「あの……よろしければ、その報告者さんの所まで送って行きますけど」

「え!?　いいのか!?」

おお、食いつきが早いですねぇ。余程焦っているのでしょうか。

「はい。ですが、条件が一つあります」

「条件?」

「その上司さんに会わせて下さい。貴方がここまで怖がるので、少し興味が湧いて来ました」

勿論、始末屋の存在を忘れているわけではない。ここに必要な情報がなかった以上、長居しても意味はないし、何より駒次郎さんとその上司という人にも取材すれば、始末屋に関する情報や得られるかもしれない。もし始末屋の噂を知らないとしても、明日の見出しは暫定的に華山椿の死亡記事。どちらに転んでも美味しい展開ですし、ここは少し情報収集の範囲を広げましょう。

「え？　上司に？　……うーん……」

おや、先程の食いつきぶりから打って変わって今度は考え始めましたね。「あの人もそうだけど……」とか、「今まで秘密にしてたし……」とかぶつぶつ独り言まで言い出す始末。これは何か裏がありそうですね。少しカマをかけて見ますか。

「嫌ならいいんですよ。駒次郎さんが遅れても私は何も困りませんからねぇ。それでは、私は先を急ぐので、これにて失礼します」

「いや、ちょっと待ってくれ！　それは困る！　理不尽だろ！」

「なら早く決めて下さいよ。私も暇ではないんですから」

こうしておけば、後は向こうの方から勝手に食いついてくれる。駒次郎さんも例外ではなく、散々唸って悩んだ挙句、「分かった！　それでいい！」と了承してくれました。私の作戦勝ちですね。

「話が早くて助かります。それで、その場所というのは一体どちらなんでしょうか？」

「あ、あぁ。三尺坊まで頼む」

「え？　三尺坊……ですか？」

驚いて、つい怪訝そうに駒次郎さんをまじまじと見る。

どうしてその場所を知っているのだろう。確かに彼は妖怪だが、あの区画に行く資格を備えているとは到底思えないし、その上司もそんな力を持っているとは考えられない。

「ん？　どうした？　まさか場所が分からないとか？　あそこは名のある天狗なら必ず行く場所だって聞いてたから、射命丸もそうかなって思ったんだけど違うのか？」

「いえ、そんなわけでは……」

「それなら頼んでいいかな?」

「は、はい……分かりました……」

つい了承してしまいましたが……本当に彼は何者でしょう?天狗しか知らない区画を知っているのは、妖怪の山でもごく限られた妖怪しか知らないはず。なのに駒次郎さんはそれを知っていた。

もしかして彼は……いえ、ありもしない事を考えるのはやめにしましょう。それをしても詮無き事。真実を伝える新聞記者が、憶測で物事を考えるのはナンセンスにも程がある。

「それでは、私の手に捕まって下さい」

取り敢えず、駒次郎さんを三尺坊まで送りましょうか。私は彼の手を取り、三尺坊に向かって大空に飛び立った。

彼は、自分の事を話すのが嫌いらしい

昔々、今の人達が聞いたら目眩がしてしまうほど遠い昔。語るものが途絶えてしまい、消えてしまった数多くある話の一つにこんなものがある。

ある所に、一人の男がいた。

その男はヤクザの世界で頭目として生きる男だったが、その筋で生きる者としても少し変わっていた。

大きな声でよく笑い、困った人や弱い人を助け、悪事を働く不届き者には裏で酷い制裁を加える。所謂侠客と言われる類のもので、警察のような役割を果たしている事もあってか街の人々からよく慕われていた。組の仲間達もまた、街を愛し、人を愛するその男を同じように慕っていた。

しかし、数年経った後にその男は死んでしまった。何者かに暗殺され、住んでいた屋敷を焼かれてしまったのだ。無論死体は黒い炭になり、巻き込まれた仲間と判別がつかなくなった。街の人はその死を悲しみ、街をあげてその死体を丁寧に弔った。男は英雄扱いされ、屋敷跡には慰霊碑が建てられる程になった。

だが、ある片目が潰れた男の出現により、その扱いは崩される事となる。死んだ男の

腹心と称したその男は、街の人も、仲間にも知らない英雄の裏の顔を語り始めたのだ。

曰く、奴は裏社会を牛耳りたいがためにこの街に入り込み、表で街の連中の懐柔する傍ら裏では博打に武器の密輸、女や奴隷の売り買いに要人の暗殺等思いつく限りの悪逆を尽くしてきた。更に裏切り者や自分の思い通りにならない奴は例え街の人であろうと容赦せず、男でも聞いただけで震え上がるような拷問の末殺したそうだった。恨み辛みが募りに募った果てに奴は死んだ。奴が殺されたのは当たり前、この世から悪がまた一人滅んだんだ。いい加減目を覚ましなさいと、男は諭すように皆に語った。

語った男は、仲間の中で嫌われていたのでその話を信じようとはしなかった。が、事情を知らない街の皆は次第に語った男を信じるようになり、各地に残る男の残滓を抹消するようになった。その結果、組の残党は男を除いて一人残らずいなくなり、男は真の英雄として街に君臨し、組がいた頃と比べて悪者が減り、その活躍は後世まで語り継がれた。

他方、死んだ男はその嫌な噂だけが一人歩きし、いつしか本来の名前すら忘れられ、最後には存在そのものが妖怪として扱われ始め、今も人々に恐れられたとさ……。

―――――――――――――――――――――――――――――

三尺坊と言うのは、言ってしまえば妖怪の山にある私達天狗達の区画の一つだ。

上位の天狗しか入る事は許されず、入るには許可が必要なくらい厳しい警備が敷かれている。つまりは上位天狗専用の会社みたいな物で、下っ端クラスの天狗達の憧れの場所となっている。

「……これはこれは。今日のご用件は？」

「鞍馬天狗様に用だ。仕事の報告をしに来た」

「かしこまりました」

通常の妖怪では門前払いを食らう筈なのに、駒次郎さんは用件を伝えただけですんな

りとその入り口を通ってしまった。普通は用があるとしても、そこから更にいくつかの質問をされる。

「……あの、駒次郎さん。貴方の上司と言うのはもしかして……」

「うん？　そうだ、お前らんとこの上司と同じ、鞍馬天狗だよ」

のらりくらりと歩きながら、同じ調子で駒次郎さんは答えを返す。やる気のない、ゆらゆらぬらぬらとした歩き方ではあるが、その姿に一部の隙もなく、満遍なく辺りに気を配っている。

「しかし……天狗でもない貴方がどうして天魔様と知り合いなのですか？」

再び尋ねると、駒次郎さんは頭を描きながら難しそうな顔で笑った。

「あー、まぁ色々あったんだよ。強いて言うなら昔からお世話になっている人って感じかな」

なんと、あの天魔様にそんな人がいたとは知りもしなかった。これはもう少し取材をしてみれば面白い記事が書けそうだ。

「へぇ、因みにいつ、どうやって知り合っーー」

「おっと、どうやら目的地に着いたようだ」

そう言って駒次郎さんが指を指す。その先には、神殿のような大きめの、私達が見慣れた神社のような建物があった。

外の世界の清水寺と言われる寺院を真似たそれは、妖怪の山で最も切り立った崖に建てられており、敷地内には少し広い舞台もある。そこから飛び降りて一気に空へ舞い上がるのは、他の妖怪では味わえない程の多幸感と充実感を運んでくる。

意図的に話題を逸らされ、私は不満そうな顔で駒次郎さんを見るが、彼は分かっていそうな上でそれを黙殺し、またもゆらゆらとした足取りで階段を登っていく。絵になりそうなその動作にも少しイラっとして、私はムッとした表情で駒次郎さんの所まで飛んで行った。

「ちょっとー、答えてくれてもいいじゃないですかー。露骨に話をなかった事にしないで下さいよー」

「悪いけど、俺はあんまり自分の事を語るのは好きじゃないんだ。この質問に関して、俺は黙秘権を使わせて貰うよ」

「そう言われると益々燃えますね。一天狗の記者として、貴方の事を色々知りたくなってきましたよ」

「おいおい、俺は喋りたくないって言っているんだぜ？　嫌がる相手に無理やり取材を強要するのはプライバシーの侵害って奴じゃないのか？」

苦笑しながら彼が尋ねる。その裏に大人しく引いてくれと言う懇願も混じっていたが、さっきのお返しとばかりに私はこう答えた。

「私の前ではプライバシーなど無力です。新聞のためなら、例え相手に嫌われるような

事をしてでもスクープを探し出します」

「なんだそれ。理不尽すぎやしないか？」

「それが記者と言うものです。しつこい烏に絡まれたのが貴方の運の尽き。貴方が地獄の果てに連れていかれても、私は追いかけて貴方のことを取材しに行きますから覚悟しておいて下さいね？」

「なんてこったい。俺はとんだ面倒事な奴に助けられたのか……」

頭を抱えながら溜息を吐いた駒次郎さんを見て、私は思わず笑顔になる。

面白い妖怪（ひと）だ。飄々としていながら表情豊かで何処か人間臭い。のらりくらりとやる気がなさそうだが、間合いに入らせる気配がない程の警戒心と殺気も強い。彼は本当に私の興味を的確にくすぐってくれる。

そんな事を思っているうちに、私達は長い階段を登りきり、中へと続く大きな門の前に着いていた。

「まぁいい、その話は後だ。これから鞍馬天狗様に報告しに行く。何聞いてもいいが、くれぐれも俺の個人的な質問をするのはなしにしてくれ」

門番に話しかける前に、駒次郎さんは私の方に振り返り、私に厳しく釘を刺した。

「……ちぇっ、分かりましたよ」

不承不承と言った感じで頷きながら、私は彼に見えないよう、背中で中指と人差し指を交差する。異国に伝わる魔除けの一種らしいが、全てを受け入れる幻想郷でこれをやってもバチは当たらないだろう。

駒次郎さんが門番と手続きをしている間、私は天魔様に聞く質問の事を考え始めていた。

――――――――――――――――――――――――――――――

「そういえば、駒次郎さんから見た天魔様って、どんな感じなんですか？」

綺麗に清掃された廊下を歩きながら、私は駒次郎さんにそう問いかける。

ある程度広く作られた廊下ではあるが、上位天狗は意外にも多く、今も沢山の天狗が忙しなく行き来している。自分達のテリトリー故、皆普段は隠している羽を思う存分広げているせいで歩きにくい筈だが、今は駒次郎さんが壁になっていてある程度歩きやすくなっている。私を慮っての事なのは見てわかるのだが、「理不尽に慣れるためだ」と、それを指摘すれば言うかもしれない。その優しさがなんとなく嬉しくて、私は心の中で笑顔になった。

「そうさなぁ……俺が子供の頃からの付き合いって事もあるが、基本優しくて面倒見がいい。後少し堅物な印象を受けるかな」

私の方へ表情は向かず、それでも恥ずかしそうな感じで駒次郎さんは頭を掻きながら答えた。

やはり彼も、私達と同じ感覚を受けるのか。

彼女は……天魔様は、我々天狗の民をとても良く思っていらっしゃる。少々真面目で堅物だが、それでも他の上位天狗に比べたらまだ柔軟だし、弱い者と接する時も物腰柔らかな姿勢は崩さない。私達をまとめ上げる上位の天狗の中でも憧れている者は数多く居て、私もその一人である。

「今、自分と同じ感想を持ったって思っただろ?」

不意に駒次郎さんが振り返り、覗き込むように私を見つめる。細いが、それでも大きく開かれた二重の目に刺され、何より心を読み当てられた事もあって私は言葉に詰まった。

それを知ってか知らずか、駒次郎さんはと大きく、面倒臭そうに溜息を吐き、再び前を向いて歩き始めた。

「分かるよ。鞍馬天狗がお前らの種族をとても愛していて、誰とでも丁寧に接するのは俺もこの目で見てきているんだ。あれがあの人本来の性格なのは知っているし、この先も変わる事はないだろうよ。ただ……」

そこで彼がまた大きな溜息を吐く。合わせるように「ただ?」と聞くと、その態度のまま再び口を開いた。

「あの人は俺の事になると少し……いや、結構性格が変わるんだ」

「と、言いますと?」

「なんて表現したらいいのかな、とにかく俺に対してめちゃくちゃ過保護になって、その割に色々と無茶苦茶な要求をしてくるんだ」

駒次郎さんの意外すぎる言葉に、私の目は丸くなった。あの四季映姫と同じくらい真面目あの方が、こんな何の変哲もなさそうな男に執着するなんて有り得ない。

「有り得ないって顔してるな。まぁ確かに、あの人は人前では態度とか殆ど変えないから、そう思うのも無理はないけど」

苦笑しながら駒次郎さんは振り向いてそう言った。

「……私は信じませんよ。あの方に限ってそんな事起こらないですから」

「いいさ。言っても信じて貰えないのは分かっていたからね。どちらにしろ、答えは自分の目で確かめた方が早い」

そう言って駒次郎さんは先にある部屋の一室を指差す。目の前には「執務室」と書かれたドア。どうやら話題の天魔様の所まで来たらしい。

「俺だ、駒次郎だ。あんたに依頼された仕事の報告をーー」

ドアをノックした駒次郎さんが用件を言い終わる前に、食い気味な「どうぞ入って下さい」が重なる。その凛とした声の主が天魔様である事に、私の目は驚きで更に丸くなった。いつもの天魔様は、一呼吸置いてから入るように声を掛けるはずなのに、どう言う事なのだろう。

同情の表情を浮かべた駒次郎さん促され、彼の後に続いて部屋に入ると、凛とした美

しい顔に眼鏡を掛けた天魔様の姿が見えた。机に向かう天魔様は、私達ですら羨むような紫烏色をした黒の髪を一つにまとめ、それが書類を書くたびにゆらゆらと揺れる。華奢で小さな、体とはアンバランスなほど大きな羽は、天狗として永く生きたという証を誇示するように誇らしく広がっている。

暫くの間、天魔様は書類の一つと睨み合っていたが、私がドアを閉めたのと同時に顔を上げ、真っ直ぐに駒次郎さんを見つめた。

「随分と遅いですね。いつもなら時間通りに来るはずじゃないですか。一体どうしたと言うんです?」

澄んでいて柔らかな声から発せられる、僅かながらの苛立ち。天魔様が怒っている時は、大抵こんな風に言葉の端に自分の感情を滲ませる。何ら変わらない、普段私達が見ている天魔様そのものだ。

「あー、これにはちょっとした訳があるんだよ。その、実はな――」

「訳?　何があったんですか。まさか任務に失敗したとでも言うのですか?」

「いや、そう言うのじゃなくてもっと下らない――」

「下らない？　一体何が下らないと言うんですか？　貴方がそうやって言い澱むってことは、私に後ろめたい事があるからでしょう？　私に隠し事は無駄ですよ。さぁ話してみなさい。何を隠しているんです？　任務に失敗した事ですか？　それとも……」

駒次郎さんが困惑したように答えようとした。その隙につけ入るように天魔様は立ち上がり、近づいて矢継ぎ早に言葉を続ける。

納得のいかない説明にはとことんまで追求する。これも怒った時の天魔様によく見られる癖だ。

もしかして駒次郎さんは単に天魔様が嫌いで、私に天魔様の負のイメージを抱かせようとしているのでは？　そう思ったその時、

「任務の途中で大きな怪我をして、それで私に要らぬ心配をかけたくないという事ですか？」

「……は？」

素っ頓狂な私と駒次郎さんの声が重なる。予想と斜め上の質問に、私達は思わず呆気にとられてしまった。慌てて口を塞いだが、どうやら天魔様は私の方には気づいていないらしい。同じく怪訝に思っているであろう駒次郎さんに同じ調子で話し続けた。

「あらあら、よく見たら貴方泥だらけじゃないですか……成る程、私には分かりますよ。貴方は昨日の仕事で華山椿と戦い、なんとか仕留めたものの負傷。夜が更けていた事も相まって明日まで現場で待機しようと考えた。ところが意外にも傷が深く、朝になったら処置をした腕が痛み出した。しかし、真面目である貴方の性格上、報告しないと気が済まない。だから痛みが引くのを待ってから這々の体でここに来た……そう言うところでしょう？　華山椿が厄介な敵である事は知っていましたが、貴方にここまでの深手を負わせるとは思っても見ませんでした。私の判断ミスですね。申し訳ありません。でも、だからと言って黙っているのは良くありません。貴方の仲間達に伝えておけばすぐにでも医者を呼ぶ事は出来たはずなのに。まぁ、過ぎたことを言うのはこの辺りにしましょう。さぁ、傷を見せてください。今からでも遅くはないですから治療をしましょう。今永遠亭の医者を呼ぶよう手配しますから、貴方はそこでゆっくりとくつろいでい

て下さい。そうそう、着物も新しいのに変えましょう。誰か、お茶と一緒に綺麗な着物を――」

「話を最後まで聞け！　仕事の道具をなくして探してたら寝過ごしただけだ！　あんたは本当にお節介が過ぎる！　俺があんな奴に傷つけられる程ヤワじゃない事は知ってるだろ!?」

「こら、何度も言っているではありませんか。慢心することは即ち失敗に繋がると。何より貴方が大きな怪我をして帰ってきて、最悪死んでしまったらどうするんです？　それを考えただけで母は夜も眠れなくなってしまいます」

「俺がいつあんたの子供になった！　そもそもこの仕事を依頼したのはあんただろ!?　これ以上勝手な真似をするなら――」

……空いた口が塞がらないとはこの事だろう。普段は冷静沈着な天魔様が、ここまで暴走気味にお節介を焼いているのは初めてだ。話を最後まで聞かない事もさることながら、何より恐らくは血の繋がりがないであろう駒次郎さんに向かって堂々と母と言う

事も、私自身の驚きに拍車をかけている。
しかし、このまま放っておけば彼らの言い争いだけで日が暮れてしまう。なんとか正気を取り戻した私は、右手を上げながらおずおずと後ろから顔を見せた。
「……あのー、お二人共、積もる話もあるとは思いますが、取り敢えず一旦落ち着きませんか？　」
私の声に気がついたのか、天魔様は興奮気味の表情を引っ込め、いつもの冷静な声で私に話しかけた。
「おや文、いたのですね。音もなく現れるものだから気がつきませんでしたよ」
どれだけ駒次郎さんに釘付けだったんだろうか……半ば呆れながらそう思っていると、「こいつは初めっから俺と一緒に居たよ……」と駒次郎さんが私に変わって返してくれた。
「おや、そうでしたか。お見苦しいところを見せてしまい、申し訳ありません……それ

で、貴女はどうしてここに？」

ここで自分の目的を天魔様に話すと、天魔様は納得したように頷いて苦笑いを浮かべた。

「成る程、実に貴女らしい理由ですね。分かりました、答えられる範囲で取材に応じましょう」

「やったー！　ありがとうございます天魔様！」

最初に見た調子のままだったらどうしようかと不安だったが、この物分かりの良さはそのままだったらしい。だが、なんだろう。どこか引っかかる所はある。まぁ、多分気のせいなのだろうが。

「それでは尚の事立ち話ではいけませんね。さぁ、どうぞそこに座って下さい。ついでに駒次郎もご一緒しても構いませんよ」

「俺はついでかよ……」

そんなこんなで、私は駒次郎さんと天魔様に向かい合う形で椅子に腰掛けた。

運ばれたお茶に口をつけ、ほぅと一息ついた天魔様は、柔和な表情で私を見つめた。

「それで？　文は私に何を聞くんですか？」

「はい、そこにおります沼田駒次郎さんの正体と、天魔様との関係を詳しくお聞かせ願いたいと――」

「ちょっと待て！　俺言ったよな？　個人的な事は聞かないでくれってお前と約束したよな!?」

先程まで同じようにお茶をすすっていた駒次郎さんが、驚いて私に噛みつきかかって来た。勿論そう来るだろうと予想はしていたので、惚けたように私も返す。

「はて、そうでしたっけ？　仮に駒次郎さんとそのような約束を交わしたとしても、所詮

は口約束ですから実質的な権限はありません。よってこの約束は無効となります」

「駒次郎、諦めなさい。屁理屈を言わせたら文の右に出るものはいません。何より口約束でなく、媒体として記録していなかった貴方の責任です」

私と天魔様からの一斉射撃を受けた駒次郎さんは、「理不尽だ……」と悔しそうに歯噛みしながら渋々席に座った。少し可哀想な気もするが、こうでもしなければ欲しい話は聞き出せない。この世はずるい人が勝つように出来ているのだ。

気を取り直して取材を始めようとした時、天魔様がジトリとした目で駒次郎さんを睨み始めた。

「と言うよりも駒次郎、まさか貴方、初対面の方に自己紹介すらろくにしていなかったのですか？」

「当たり前だ！　仕事が仕事だし、新聞に載ったなんて日にゃ今度はこっちが奴らに始末されかねんわ！　鞍馬天狗、あんたそれを分かってて言ってんのか!?」

駒次郎さんが怒鳴り返した瞬間、私自身にはっきりとした疑問が浮かび上がって来た。始末？　奴ら？　一体どう言う事だろうか。と言うより、そんなおっかない人たちに狙われる彼は何者なのだろうか。

「勿論分かっています。しかし私は貴方の、いえ、貴方達の強さを信頼しているんです。それに、そうしてくれた方が私としても好都合なのでね」

貴方達？　それじゃあ駒次郎さんには仲間がいるって事？　だとしたら、その仲間達も彼と同様にその奴らとやらに始末される危険がある。もしかすると、彼が命を狙われる理由はこの仲間達に原因があるのではないだろうか。

「あのなぁ……何が好都合かはさておき、信頼しているなら尚の事過保護になるのをやめろよ。俺はそこまでやわじゃないしさ」

「それとこれとは話が別です。子の心配をするのは母親の務めですから。」

「だからあんたは俺の母親じゃねぇってあれほど――」

先程から天魔様が言っている母親とはどう言う意味なのだろう。面識があるとはいえ、ここまで肩入れするのは流石におかしい。

あぁだめだ。これ以上は耐えられそうにない。私は二人の会話を遮って矢継ぎ早に質問責めにした。

「ちょっと待って下さい。色々と聞きたいことが山積みです。奴らって誰なんですか？　始末されるって誰に？　そもそも私は、駒次郎さんが誰かに始末されるような人には到底思えません。確かに彼の体からは微かに妖力が感じられます。が、パッと見た感じ私には駒次郎さんがそんな悪人だとは考えられないのです。そんな彼が、どうしてそんな方達に狙われる可能性があるのですか？」

有無を言わさない速さで繰り出される私の質問に、駒次郎さんとの話が途切れた天魔様は困惑してしまった。何とか私を制止させると、コホンと咳払い一つして再び元の落ち着いた表情に戻って私を見つめた。

「そんなに急かさずとも大丈夫ですよ。貴女が仰る疑問の殆どは、彼の真の正体を知る

事で解明されますから」

そう言って天魔様は、駒次郎さんの方へ目線を合わせる。向けられた駒次郎さんは「しょうがねぇなぁ……」とため息混じりに呟くと、さっきまでとは違う、如何にも鋭そうに見開いた目で私を見つめ、口を開いた。

「んじゃ、改めて挨拶をしよう……。俺は、生まれも育ちも外の世界。名を沼田駒次郎と言い、妖怪の山を統べる天狗が一人、鞍馬天狗直属の始末屋。三度の飯より趣味のチェスが好きな、ぬらりひょんというしがない妖怪さ」

若干芝居掛かった口調で、駒次郎さんは口上を述べた。天魔様が面白そうに微笑んでいる。多分、彼はいつもこの口上をこんな調子で述べているのだろう。

私も天魔様にならって笑うべきだったかもしれない。しかし、この時の私にはそれが出来なかった。目の前にいる彼が、今まで散々におちょくって来た沼田駒次郎さんが、私が追っていた始末屋の正体で、しかもあの大妖怪のぬらりひょんだったなんて思いもしなかったからだ。

心なしか、彼の体から発せられる妖力が大きくなった気がして震えが止まらない。駒

次郎さんが意図的に発しているのか、それとも私の勘違いなのか、それすらも分からないまま、それでもこれ以上怒らせたらまずい事は本能から警告しているから、私はただ俯いているしか方法がなかった。

「以後よろしくな、文々。新聞編集者兼記者、射命丸文さん?」

駒次郎さんの笑顔が、何処と無く邪悪に見えた気がした。

どうやら彼は今日、厄日らしい

ぬらりひょん。

世間では鬼と並んで全妖怪の総大将だったり、怪物の親玉だったり、果ては神様扱いされたりと、最早どうしてこうなったと思わざるを得ない程勘違いされた妖怪であり、その実態を知る人は恐らく一般人では殆どいないだろう。多分、幻想郷ですら知っているのは一部の名のある妖怪だけだと思う。

故に、その正体を知った者は皆一様に逃げ出す。もしくは泣いて命乞いをするかのどちらかの行動をとる。これが妖怪ハンターや陰陽師辺りの天敵だった場合は立場が逆転し、今度はこちら側が逃げ出さねばならない事になる。

どちらにしても、俺やその他のぬらりひょん達にとってはこの勘違いは迷惑でしかない。うっかり自分の秘密を喋ろうものなら百年来の親友ですら恐怖で距離を置かれ、実生活にも支障をきたす。最悪の場合、いつ死ぬか分からないような逃亡生活に陥る羽目になり兼ねない。事実、俺自身もそんな生活を何度も送ってきていたから、その大変さ、何よりもその理不尽さは大いに理解しているつもりだ。あんな生活、二度と送りたくはない。まぁ、この生活を送ったお陰で自分の身を守れるような力や技術は身についた

し、一概に理不尽とは言えないが……いや、そのせいでこんな仕事をしているのだからやはり理不尽な事には変わりない。

誰からも恐れられる存在。それが皆から見えるぬらりひょんの存在だ。

「……で、どうしてお前はいきなりそんな格好をし始めたんだ？」

だからと言ってこんな反応をされるのは、俺自身にとっては予想外以外の何物でもないのだが。

目の前にいる少女……烏天狗の射命丸文は、誰がどう見ても見事と言わざるを得ない程綺麗な土下座をしていた。艶めく美しい黒髪と同じ位黒い翼が小刻みに震えている。

その様子に鞍馬天狗はクスクスと笑いを堪えているが、同じ状況を想像したら洒落にならない事は分かっているので、俺は笑う事が出来なかった。

「い、いや……その、さっきまでの私は貴方に対してとても失礼な態度をとってしまいましたので、そのお詫びというか、精一杯の命乞いというか……今まで失礼な事をして、本当にすみませんでした！」

どうやら本気で怖がっているらしい。今にも泣き出してしまいそうな声色と表情でこちらを伺っている。

こんな態度をされるのは今に始まった事ではないが、流石に土下座をされたのは初めてだ。何より、これまでに出会った烏天狗は逃げるしか能のない連中が殆どだったから、この部屋から飛び出さなかっただけでも俺としては十分驚いている。

先の約束を反故にされた事もあって、この勘違いを放置させたまま少しばかりいじっても良かったが、隣に鞍馬天狗がいる事もあってそれは慎んだ。代わりに一つのため息を吐き、射命丸の顔を上げさせてこう尋ねる。

「あのさ、先ず聞くけど、射命丸は俺に対してどんな感情を抱いていたわけ？」

「え？……駒次郎様の正体を知る前は、少し妖力があるくらいの弱小妖怪かと思っていました。今は貴方から発せられる妖力に押しつぶされてしまいそうです……」

残念ながらそれは射命丸の勘違いだ。元々ぬらりひょんという種族は、そこまで妖力を蓄えられるわけではない。

「大丈夫だ、それは単にお前が怖がり過ぎてるだけだから」

苦笑しながら落ち着かせようとするが、尚も射命丸は震えたまま警戒した状態で首を振っている。これは一から説明をしなければ納得はしてもらえないらしい。

補足を頼むと鞍馬天狗に目配せをして、俺は丁寧に説明を始めた。

「いいか？　射命丸が……いや、お前を含めた妖怪や人間の全般が信じているぬらりひょんって言うのは、実のところ全くの出鱈目だ。本来のぬらりひょんは、大昔の人間から分裂した、謂わば人間の遠縁みたいなものなんだよ」

ぬらりひょんの種族に伝わる伝承では、弥生の昔に突然的に妖術を使える人間が一人現れたと言われており、これがぬらりひょんの始まりだとされているらしい。ただ、その力は余りに弱く、精々長く生きる、自分の体を回復させる程度にしか用途はなかったらしい。怪我をしても三日で再生し、流行病にはかからない。つまるところ健康に特化した能力だったそうだ。

その能力故、当時の人々は神と崇め奉ったが、当の本人はそれで満足出来なかったらしい。あらゆる魔法や法力を研究し、果ては邪法にまで手を染めたらしいが、ついぞそ

のような力は身につかず、邪法の副作用によって死んだ。しかし、その力は受け継がれる事で強くなるものだったらしく、後々の時代にはまばらながら能力を持つものが増えてきたと言う。

普通の妖怪ならば自分の力を誇りに思う事だろうが、俺たちぬらりひょんの一族は違った。元々人間から派生した為、先祖達は邪法から生じた自分たちの力を忌み嫌い、一時は箝口令を敷く程にその存在を秘匿しようとした。この徹底的な隠蔽によって、近代以後までその存在は闇の中に葬られた。

この長く暗い歴史のおかげか、ぬらりひょんの種族は基本的に臆病で影が薄い者が多い。遥か昔に叩き込まれた教えを遺伝子レベルで刻まれている為、必要以上に前に出ようとはしない。しかし、人間の時の名残なのか少しでも人と接することを望んでいる。だから会話には参加しないがその場にはいると言う奇妙な接し方を始めた。いつのまにかその場にいると言う伝承は、この接し方に由来している。名前であるぬらりひょんも、ぬらりとして相手に正体を明かさず、ひょんと突然消えるところからきている。

「分かったか？　お前達が怯えているぬらりひょんのイメージってのは虚構で、寧ろ俺たちの方がお前達を怖がっている。勿論例外な奴らはいるが、基本的にぬらりひょんとお前達の立場は逆なのさ」

「でも……それならどうして私達が知るような状況になったんですか？」

「それは、江戸の時代にいた一人の男によってそうなったのです」

ここで鞍馬天狗が口を開いた。

「私が幻想入りする前の事でした。江戸の街に霧沼と言うヤクザ組がありましたが、頭目の男が到底口では表せないほどの悪党で、考え付く限りの悪行をその街で行ってきたのです。最期は仲間の裏切りにあって屋敷ごと焼き討ちにされましたが、その存在は死んだ後も人々の脳裏に焼き付いてしまいました。その男は人の心をつかむのに長けており、人の家に突然に押し入ってはお茶や煙草を勝手に頂いていたことから、これを人々がぬらりひょんの特徴と勘違いしてしまったのです」

そう、しかも不運な事にこれを人間が創作として世に出してしまった為、鞍馬天狗が幻想入りした後もその悪い噂は絶える事なく、どこかの村では魔女裁判で沢山の人が磔にされたと言われている。事実、その村にもぬらりひょんはいたので、同胞を失った事

も多くの人間が死んだ事も、俺としては耐え難い理不尽として脳裏に刻んでいる。

「その頃には射命丸は幻想郷にいましたから、詳しいことは恐らく分からないと思います。ですが、これは頭に入れなさい。彼らは幻想郷にも住んでいます。しかし、その多くは決して世間で語られるような悪党ではありません。皆臆病ですが、とてもいい方ばかりです。新聞を作っている貴女なら分かると思いますが、噂に惑わされては良い記事は書けません。自分の目と耳で得たその真実を書きなさい。いいですね？」

「は……はい！　私、精一杯頑張ります！」

鞍馬の凄いところは、その語り口であると天狗達は言う。あっという間に射命丸の目から恐怖が取り除かれ、逆に生き生きとした意欲と笑顔で溢れかえっていた。よく見るとその笑顔が可愛らしいと感じたが、恐らく奴はそれをネタに俺をいじってくると思い、慎んだ。

「それにしても、天魔様はどうしてそこまでお詳しいんですか？　それは駒次郎さんとの関係と何か繋がりがあるのですか？」

早速この質問をして来た射命丸に、俺は内心苦い顔をする。先程のどさくさで忘れていてほしいと思っていたが、しっかりと覚えていたようだ。

余計な事は言うなよと鞍馬天狗を睨むが、それに気づいているのか分からないような澄まし顔で答え始めた。

「私は駒次郎の家族と交流がありましてね、時折彼の乳母をやっていたのですよ。彼の母親はぬらりひょんでしたが生憎病弱で、彼が小さい頃に亡くなってしまいました。幸いな事に彼の父親も私の悪友だったので、私が幻想入りするまでは彼の世話を引き受けました。だから、私にとって彼は友人の忘れ形見であり、大切な息子であるのです」

「へぇ……だから先程、あのような態度をとったわけですね。納得です」

「当然です。母親として、息子の心配をするのは義務ですから。そうでなければ死んだ二人に面目が立ちませんよ」

穏やかな笑顔を浮かべながら、鞍馬天狗はそう言い切った。

彼女がそう思っているという事は、俺自身も薄々感じていた事だった。血も、種族すら違う俺の事を大切にしていて、尚且つこうやって息子だと言ってくれるのは、凄く嬉しいし何より感謝もしている。幻想郷にやって来た時、味方もなく、ボロボロだった俺を真っ先に保護してくれたのは鞍馬天狗だった。俺にとっても彼女は大切な人である事は変わらない。

多分、この先俺はずっと鞍馬天狗の下で働き続けるだろう。一生かけても返せそうにない恩を、彼女から貰っているのだから……それでも面と向かって誰かに母と答えるのは流石に恥ずかしいし、始末屋とか言う理不尽極まりない仕事に就かせたのは、未だに許されない事ではあるが。

「なんだか憧れますね。私、今まで誰かにそうやって大切にして貰えたことないですから……おっと、今は私の事なんて関係ありませんでしたね！　さぁ、どんどん行きますよ！　次は――」

その時、部屋の扉がノックされ、外から声が聞こえた。

「天魔様、椛です。麓の処理が終わりましたので報告に参りました」

妙に可愛らしい声だ。恐らく里の住人が十人聞いたら大体半数は気絶してしまうんじゃないかと邪推してしまうほどの声。

まずい、早く隠れなければ。そう思った時には時既に遅く、俺が隠れる前に鞍馬天狗が「どうぞ入って下さい」と答え返していた。

「おい鞍馬天狗！　何やってんだ！」

「駒次郎、前々から思っていたのですが、貴方は少し臆病が過ぎます。身分がバレた時のリスク回避なのは分かりますが、ここは全てを受け入れる幻想郷。親しい者くらいにはその仮面を外してもいいじゃありませんか。幸いにも、部下の犬走椛は物分かりがいいので、事情を話せばすぐにでも納得してくれます」

鞍馬天狗が答え終わると同時に、件の犬走椛が姿を表す。

白狼の名に違わぬ短くて白い髪に、これまた霊夢の巫女服に似た白い天狗装束。対照的に黒いスカートには、裾に赤、フリルに白と秋の趣を感じさせるデザインである。最大の特徴である犬耳は、俺や射命丸を見るなりぐっと前に突き出され、尻尾はピンと直

立していて余程警戒心が強いのかが伺える。
典型的な、可愛らしい白狼天狗の少女だ……目に明らかな敵意と殺意が浮かんでいなければ、の話だが。
「……二つ、天魔様にお伺いします。一つ、何故文さんがここにいらっしゃるのですか？　もう一つ、そこにいる客人は一体何者で、どこから現れたんですか？」
直感で悟った。こいつ、絶対に話を聞かないタイプだ。こう言うタイプは勘違いが起きないように慎重に話すのが定石……。
「彼は沼田駒次郎さんです。取材中に出会って協力させて貰っています。凄いんですよ椛、彼は噂に聞くあの始末屋なんです！」
なんて考えていたら、よりにもよって射命丸文（最悪な相手）に、しかも一番まずい言い方で自分の正体をバラされてしまった。椛の放つ敵意が一層強くなる。
「始末屋……？　どうしてそんな奴が天魔様のお部屋にいる？　さてはお前、客人を

装って天魔様を暗殺するつもりだな！」

まずい、非常にまずい。このままでは俺は叩き斬られて無駄に命を散らせてしまう。なんとかして誤解を解かなければ……。

「い、いや、違う。俺はそんな事をするつもりは断じて――」

「問答無用！」

そうだった、この子は話を聞くような妖怪じゃなかったんだった……。

彼女は背負っていた背丈くらいの大きな剣をすらりと抜き、明確な殺意を持ったまま俺の方に突進してくる。最初の時点である程度覚悟しておくべきだったか。

すぐさま意識を戦闘状態に切り替え、立ち上がって此方からも椛を迎え撃とうとした。その瞬間、両者の間に一陣の風が吹き、俺たちの動きを完全に止めた。この風は……鞍馬天狗のものだ。

「二人とも落ち着いて下さい。椛、駒次郎は確かに始末屋です。が、彼は私の部下であ

り、私の家族です。怪しいものでも、況してや私の命を狙いに来たわけでもありません。なので早急にその剣を下ろしなさい」

「しかし！」

「二度同じ事を言わせないで下さい。今回は話を聞かずに襲った貴女に非があります。認めないのであれば、貴女にはそれ相応の覚悟をしてもらう必要がありますよ？」

そう言って鞍馬天狗が眼鏡をずり上げた瞬間、首回りを這うような嫌な風が吹き抜けた気がした。実際には吹いていないはずなのに、そう感じさせてしまう程の恐怖心をここまで煽らせるのは、鞍馬天狗が本気で怒っている証拠だ。こんなに怒りを露わにする鞍馬天狗は久しぶりに見た。

「も……申し訳……ございません……」

これで椛は完全に萎縮してしまったらしい。青い顔をしながら恐る恐る謝罪の言葉を口にした。横で見ていた射命丸も、表面上は面白そうにニヤついているが、目には恐

怖を浮かべており、いつ自分に雷が落ちるかびくびくしている。

「駒次郎、貴方も貴方です。やましい事がないなら堂々と違うと答えなさい。びくびくしていては相手に舐められるだけですよ？」

「そ、そうだな……以後気をつけるよ……」

この状態の鞍馬天狗を刺激したら、何が起こるか分かったものじゃない。俺は無難な答えを返して理不尽な怒りを回避した。

「それから……文？」

「ひゃい！　ななな、何でしょうか!?」

「貴女……また私に断りもなく他部隊に押しかけたそうですね？」

「あややややや!?　どうしてその事を知っているのですか!?」

「部隊長から連絡があったのですよ」

「じゃあどうして椛が報告に!?　後始末の報告は本来部隊長が行う筈でしょう!?」

「多分貴女は知らないと思いますが、彼が急に用事を思い出して早退したそうなのです。なので彼女に諸々の指揮をお願いしました。使いも送りましたので、現場にいた白狼天狗達は全員知っていると思ったのですが？」

鞍馬天狗の口ぶりからすると、これまでにも何度かそういう事をして来たらしい。規則違反者には厳しい罰があると聞いた事があるが、それを分かってて何度もするとなれば、最早馬鹿としか言いようがない。いや、チャレンジャーと言うべきだろうか？

「毎回毎回私は貴女に諭してきましたが、貴女は聞き入れてはくれませんでしたね。ですので今回は敢えて何も言わず、自分から報告するまで待っていたのですよ。それなのに貴女ときたら、報告どころか嘘までついて呑気に駒次郎の取材ですか。こうなれば呆れて物も言えません。何より許せないのは、新聞記者という肩書きにも関わらず、相手

に誤解を招くような言い回しでで駒次郎を紹介した事です……本来だったら、母親である私が紹介する筈だったのに」

結局あんたはそこに行き着くんかい。それに俺はあんたの息子になった覚えはないとあれ程言っているのに……なんて事、今の鞍馬天狗に言えるわけがないので内心で呆れるだけにしておいた。

「と言うわけで、明日から一週間文々。新聞の発行を禁じます。それに加算してこれから先、私の許可なしに駒次郎および彼と私の関係や能力、始末屋の仕事に関する一切の情報の公表も禁止です」

「そんな殺生なぁ！　折角のスクープが水の泡になるじゃないですか！」

「諦めなさい。これも貴女の自業自得、身から出た錆でしょう？」

「うぅぅぅ……あの時の違和感の正体はこれだったのですね……この射命丸、不覚です……」

机に突っ伏して泣く射命丸。当然と言えば当然の報いなのだが、ここまで泣かれるとどうすればいいか分からなくなる。俺の個人的な情報を鞍馬天狗が守ってくれたのは凄くありがたいけど、流石にこれはやり過ぎじゃあなかろうか。

「駒次郎？　私は貴方に感謝こそされど、やり過ぎだと思われるような事はしていない筈ですけど？」

再度眼鏡を直しつつナチュラルに心を読んだ鞍馬天狗に、あんたはいつからさとり妖怪になったんだと内心でツッコミを入れた。

そうしてわちゃわちゃやっている内に、今まで蚊帳の外だった椛がおずおずと口を開いた。

「そ、それで……天魔様、結局この方は一体何者なのでしょうか？」

……最早そのまま隠し通す事は出来ないらしい。観念した俺は諦めのため息をつくと、椛に向かい合って右手を差し出した。

「射命丸や鞍馬天狗の言う通り、俺は鞍馬天狗直属の始末屋さ。名は沼田駒次郎。三度の飯よりチェスが好きなぬらりひょんだ。どうぞよろしく、椛」

「……犬走椛。朱百部隊長の下で働く白狼天狗だ」

完全に警戒されてしまったが、差し出された手を取って握手してくれるあたり、まだ救いはあるかもしれない。

「言っておくが、私はお前を信用したわけじゃないからな！　貴様はあの極悪非道の大妖怪なんだ。ここは天魔様に免じて一旦は見逃してやろう。ただし、妙な真似をしたらすぐに叩き斬る！　覚えておけ！」

……なんて期待した自分が馬鹿みたいだ。ここは大人しく、彼女の思うぬらりひょん像を少しだけ演じておこうかな。

「……おー怖い。肝に命じておくよ。じゃあな鞍馬天狗、そろそろ俺は帰るから。後は

よろしく」

そんな淡い期待が儚くも崩れ去ったところで、俺は握手を解いて帰ろうとした。その時、

「待ちなさい駒次郎、貴方はここまで言われて悔しくはないのですか？」

まだ声に若干の怒気を含んだ鞍馬天狗が俺を呼び止めた。

「悔しいも何も、それが椛の持った印象ならしょうがねぇだろ。そんなアホらしい事で一喜一憂するのは馬鹿のする事だ。俺はそんな面倒な事はしない主義でね」

「成る程……ところで椛、貴女は駒次郎の事を信用していないようですね」

「当たり前です！　始末屋なんて、金さえ払えばすぐに寝返る奴らばかりですよ？　況してやぬらりひょんは厚かましくて、他の妖怪達を何とも思っていない奴らが殆どです！　天魔様がいつ彼と親子の契りを交わしたかは分かりませんが、どれだけ天魔様が彼

を信じていても、私は貴女と同じように信じられるとは到底思えません！　そもそも彼が始末屋という根拠すらありません！　彼にそんな力があるようにも見えないし、武器の類すら持ってない奴が始末屋を名乗るなんてちゃんちゃらおかしいでしょう!?」

先程の怯えようは何処へやら、マシンガンのように放たれる椛の言葉は真っ直ぐに鞍馬天狗に向かっていく。多分話を聞かないだけでなく、こうと思い込んだら一直線にそれを信じる性格でもあるのかもしれない。

当の鞍馬天狗はと言うと、そんな椛の言葉を受け止めるように黙って聞いていて、俯きがちに何かをぶつぶつ呟いている。

やがて椛が全ての言い分を吐き終わり、鞍馬天狗もまた、何かを思いついた風に顔を上げた。この満足気な表情は……何かロクでもない事を思いついたようだ。

「そう言えば椛、駒次郎、私はまだ貴方達に罰を与えてはおりませんでしたね」

罰？　いきなり何を言いだすかと思えば……何故今更罰なんだ？

「椛は言わずもがな、勘違いで私の息子を襲っただけでなく、あろう事か私の目の前で侮

辱しました。覚悟した上での事でしょうが、流石の私でさえ少し傷つきましたよ」

「申し訳ありません……ですが！」

「ええ、分かっていますよ。貴女は私の事を考えてそのような啖呵を切ったのでしょう。しかし、そこで部下の失言を許してしまっては、上司としての面子を保つことが出来ません。それは駒次郎に対しても同じです」

ここで鞍馬天狗が俺の方に向き直った。

「私は貴方を誇りに思っています。例えどんなに貴方がそれを否定しても、私はそれを認めているつもりです」

瞬間、俺の背中から嫌に変な汗が出始める。

「ですから、貴方が愚弄されるのを見てしまったら、黙って見ているなんて事は出来ません」

経験上、こんな風に改まって俺の事を褒める場合、その後に来るものはとんでもないものが多い。先の罰の話が既に出ている事もあって、俺の警戒心は更に高まった。

「私は上司としても、一人の母親としても、貴方のその強さや考え方は評価しているんです。だからこそ、私は椛や射命丸、その他の部下に知らせたい。これが私の息子だと、胸を張って言いたいのです。しかし、貴方は面倒臭がりですから、そんな無駄な事はしたくないと、のらりくらり躱すのでしょう。なので……」

……読めた。いや、読めてしまったと言うべきだろうか。

今までも、鞍馬天狗は俺の事を口外したがっていた。その度に俺は適当な理由をつけてぬるぬると誤魔化し続けてきたのだ。何せ仕事が仕事だし、さっきも言ったがバレたらこちらが追われる身となる。のらくらと生きるがモットーの俺にとって、こんな悲惨な状況に成り下がるのは真っ平ゴメンだ。後は色々個人的な事情もあって、進んで答えるのも嫌だった。

鞍馬天狗が何か意図があって口に出したいのか、それとも単に自慢したいだけなのか、それは俺にも分からない。だが、今まで起こったこのトラブルから、一つだけ分かっ

た事がある。
それは……。
「なのでこれから、貴方達二人で戦って貰って、その強さをお互いに証明して下さい」
今日の俺は、厄日に近い程運が悪いらしいと言う事だ。

彼女は、彼の強さに驚きを隠せないようだ。

面倒な事になったなと思う。

鞍馬天狗の顕示欲がここまで強かったのを想定してなかった俺に落ち度があるとは言え、今まで上手く隠しおおせて来た自分の力をここで晒すのは問題だ。噂好きの鴉天狗の奴らの事だから、多分これを聞いたら格好のネタとして大々的に報じるだろう。

唯一救いなのは、これを見られる奴が情報開示を禁じられた射命丸だと言う事。これが別の鴉天狗なり白狼天狗なりだったら、俺は振り切ってでも逃げていたと思う……鞍馬の奴が自分で言ったら話は別だが。

「……おい、何をぶつぶつ言っている」

剣呑な声。顔を上げると、木刀と木の盾を持った犬走椛が俺を睨みつけていた。

普段は白狼天狗達が修行をしている道場には、俺と椛、射命丸と鞍馬天狗の四人しかいない。無論、誰も入ってこれないように入り口は全て封鎖して結界も張ってある。これで気兼ねなく戦えるわけだが……やはり気乗りはしない。

報告終わったら飯食って寝るつもりだったんだがなぁ……すっかり予定が狂っちまった。

「別に。ただ面倒くさいなって思っただけだ。気にするな」

「ふん、そんな軽々しい事を言っていられるのも今のうちだ。この山に二度と入って来れないよう念入りに打ちのめしてやる」

どうして天狗というのはこうも高慢で頑固なんだろう。面子だかなんだか知らないが、たかがそれだけの為にこんな事をするのは馬鹿げている。一応鞍馬天狗の事もあるため此方としても真面目に戦うつもりだが、そうでなかったら始まった瞬間に自分から降参していたところだろう。

「で、ルールはどうすんだ？」

訓練用のクナイの具合を見ながら鞍馬天狗に問いかける。

「そうですね……では、シンプルに先に降参した方が負けとしましょう。それ以外は目潰しや大きな怪我をさせるものは禁止とします」

了解。と返事を返し、再び目線を椛に向ける。既に道場の造りや広さ、強度なんかは把握済みだし、いつも通り動けば問題はない。後は油断さえしなければ負けないだろう。宣言した椛には悪いが返り討ちにさせてもらう。

「二人とも、準備が整ったようですね。それでは犬走椛対沼田駒次郎の試合……始め！」

かくして俺たち二人の決闘は幕を開けた。

｜｜｜｜｜｜｜｜｜｜｜｜｜｜｜｜｜｜｜｜｜｜

「始め！」

天魔様の凛とした声が、道場内に響き渡る。椛と駒次郎さんの戦いが始まった瞬間だ。

椛の強さを知っている私からすれば、並みの接近戦で駒次郎さんが勝てる確率は極めて低いと考えている。少し前に行われた組み手大会では、隊長格の天狗たちを抑えて堂々の一位に輝いているし、知能を持たない低級妖怪なら軽くあしらえる位には戦闘にも手馴れている。多少踊らされやすい気質ではあるが、それを差し引いても白狼天狗の中ではトップの実力を持っているのは間違いない。

方や駒次郎さんも確かに強いだろうが、強さのベクトルが違うと私は感じる。種類としては椛とは逆に暗器や罠を使ったりと、暗殺者らしく影や死角を突くような戦い方を好むように思われる。真っ向から勝負しても、武芸百般を学んでいる椛にとっては格好の餌食。そこをどう策を巡らせ、攻略していくかが駒次郎さんの課題となるだろう。逆に椛は乗せられやすい性格が悪い方向に出ないかが重要となる。

……と、始まる前まで私はそう思っていたのだが、いかんせん二人に動きがない。間合いを図り、お互いの出方をただただ窺っているだけで、一向に攻撃する気配が見えない。

「ちょっとー！　二人ともなーにやってんですか！　そんなビクビクした戦い方してもつまらないだけですよ！　私たちはもっとこう、白熱した戦いが見たいんですよ！」

とうとう痺れを切らした私は、大きな声で二人にヤジを飛ばした。

「文、少し落ち着きなさい。あれで結構白熱しているんですから」

「それは心理戦だけでしょう!?　私はガツガツとぶつかり合う光景が見たいんですよ！」

天魔様に文句を言っていると、椛が急に構えを解き、はぁ、と重いため息を吐いた。

「文さんの言う通りだ。貴様舐めているのか？　さっきから見ていればぬるぬると私の様子を窺っているばかり。よくそれで始末屋を名乗っていられるな。私だったら恥ずかしくて顔負けが出来ないぞ？」

苛立ちを含んだ椛の言葉に、一瞬だけ天魔様が不機嫌な表情を浮かべる。しかし、当の駒次郎さんはムッとするどころかクスクスと笑いを堪えており、余裕そうな様子を崩さない。それどころか面白そうに椛を眺めており、その姿はどことなく仙人の姿を思い浮かべさせた。

「分かってないねぇ、戦いって言うのは情報がモノを言うんだよ。先に動いて手の内を晒すなんて愚の骨頂。まずは地固めからやって、序盤を凌ぐことが重要なの。聞いた話じゃ大将棋を指すらしいけど、そんなんじゃそっちの腕もたかが知れてるなぁ、犬走椛ちゃん？」

「なんだと……！」

「おぉっと、そんなに吠えるな。あんまり吠えるとお里が知れるぞ？　あぁ、もう知れてるか。ゴメンゴメン。傷つけちゃったかな？　お詫びにこれ終わったら犬用の骨買ってやるから――」

先に動いたのは椛からだった。目にも止まらぬ速さで駒次郎さんに襲いかかってく

る。

が、完全に挑発に乗せられており、太刀筋は見え見え。あっという間に躱されてしまった。それでも諦めず、尚も切り掛かるが、冷静な判断が奪われた状態でまともに当たる訳がない。

のらりくらりと身を捻り、するりと躱し、時々思い出したかのように持っているクナイで弾き、駒次郎さんは軽々と椛の攻撃をいなしていく。

「この……真面目にやれぇ！」

「大真面目さ。アンタが堅物すぎるだけ」

余裕な感じの駒次郎さんに対し、椛は完全に踊らされている。予想通り、彼女の短気な性格が悪い方向に災いした証拠だった。

「彼の強みの一つは、相手を上手く自分の舞台に引きずり込む事です」

ここで天魔様が口を開いた。

「おだて、煽り、取引、はぐらかし。ありとあらゆる手段を講じて相手を上手くその気にさせ、自分の思うような動きをするように仕向ける。乗せられやすい相手なら効果は絶大です」

嬉しそうに語る天魔様だが、それだけじゃいくつもの修羅場を乗り越えられる筈がない。

確かに今は椛の方に余裕がないし、体捌きは見事なものとはいえ、攻撃する手段がなければ意味がない。何より今回は一対一だが、これが集団だった場合や追い詰められた状況なら火に油だ。

「……どうやら、彼には攻め手がないと考えているようですね」

優しく微笑みながら天魔様が私に話しかける。どうやら表情から私の心を読み取ったらしい。思わず「はい……」と呟いた。

「大丈夫、あの子には頼れる仲間達がついていますから」

「仲間達？　それって一体……」

尋ねかけた瞬間、戦局が大きく動いていた。

「おっと……」

あれほど攻撃を躱しまくっていた駒次郎さんが、何時の間にか壁際まで追い詰められていた。幾らか落ち着きを取り戻した椛によって、ジリジリと後ろに詰められていたのだ。

「はぁ……はぁ……漸く追い詰めたぞ、この臆病者め。危うくお前の策に溺れてしまうところだった」

既に駒次郎さんの術中にはまっていた気がするのだが……後からこっちに飛び火するのは嫌なので、口にするのはやめておこう……。

「へぇ、あれだけ顔真っ赤にしながら木刀ブンブン振り回しておいてよくそう言えるな。完全に嵌りまくってたじゃん」

そんな私のささやかな優しさを知ってか知らずか、駒次郎さんは容赦ない物言いでその言葉を叩き斬った。

再び椛の顔が赤く染まる。が、罠だとわかっているのかすぐに収まり、落ち着かせるために刀を持ち直した。最も、身体は怒りで震えており、我慢の限界が近い事は窺えるが。

「……ふっ、フフフフ……また私を誘い出すつもりか？　もうその手には乗らんぞ。そんな見え見えの挑発に乗っかる程私は甘くない」

「あぁそう。で、そんな事をわざわざ宣言してどうすんの？」

「決まっているだろう……手加減してやるから、もう二度とその顔を妖怪の山に見せるな！」

再び椛が斬りかかった。鋭く、速い斬撃が、真一文字に彼の体を襲う。舞い散る木の葉すらも容易く斬り裂く椛の太刀筋を捉えられるものは、全ての天狗はおろかこの妖怪の山には殆どいない。私ですら見切るのは難しいこの速さと正確さは、他の白狼天狗にはない椛だけの強みだ。

冷酷無比の一閃が、なんの躊躇いもなく駒次郎さんを斬り裂く。いくら名うての暗殺者でも、喰らってしまえばそこで終わり。勝負は決した、椛の勝ちだ。

少し彼を過大評価し過ぎただろうか。そう思った瞬間だった。

彼は椛の目の前から消えていた。いや、消えたというのは語弊があるかもしれない。彼は飛んでいた。

曲芸師のように軽々と、空に舞う鳶のように高く優雅に、あの神速の剣さばきを易々と避け、椛の頭を踏んで飛び上がったのだ。

その状態のまま彼は体を翻し、手にいっぱいのクナイをこれでもかと放つ。

しかし、それを予期していたのか椛もまたすぐさま体制を整え、持っていた盾でクナイを受け止めた。

それでも彼は攻撃をやめない。着地した後も椛目掛けてクナイを投げ続け、的にならないように動きながら彼女との距離を保っている。一方の椛は駒次郎さんの攻撃を剣で弾きながら避け続け、反撃の隙を伺いながら彼の接近を許さないように牽制してい

る。
一見すると激しく拮抗した状態だが、椛はこの状況で無類の強さと集中力を誇っているのを私は知っている。僅かではあるがこの戦い、椛が先に動けば勝つのは彼女だ。

「……そこだ！」

予想が的中した。足元を襲ったクナイをジャンプして躱し、勢いそのままに駒次郎さんに襲いかかって来る。

「避けて下さい駒次郎さん！　あんなの食らったらひとたまりも……！」

「はっ、知れたことよ」

吐き捨てるように彼は呟き、持っていた両手のクナイを振り上げる。
その行為に、私は戦慄する。まさか、彼はあんな小さな物であの速さの斬撃を受け止めると言うのか？

「無茶ですよ！　こんなの受け切れるわけがない！」

「血迷ったか始末屋！　そのまま後悔して吹き飛べ！」

刹那、互いの身体が交錯した。木刀が逆袈裟に斬り上がり、ほぼ同じタイミングでクナイが振り下ろされる。結果は目に見えて分かった。駒次郎さんのクナイは弾かれ、床に転がっていった。

木と鉄がぶつかる嫌な音が、部屋一杯に響き渡る。あまりに大きく、長く続くその音は、緊迫したこの状態を的確に表現しているかのようだった。

そして、

「……いってぇ」

駒次郎さんが膝をついた事で、それは一気に解かれた。

「ハハハハハ！　見たか！　これが私の実力だ！」

勝利を確信したのか、振り向いた椛が勝ち誇ったように笑う。

「大口を叩いた割には随分とあっけないじゃないか、始末屋。受け止められると思っていたのか？　残念ながらそれは勘違いだ。私の一撃は並みの天狗とはわけが違う！　何年も何年も、精神を研ぎ澄まし、ひたすらに修行を続けた末の成果だ！　お前如きが正面切って捌ける程のものじゃあないんだ！」

煽るように椛がまくし立てても、駒次郎さんは何も言わない。痛みに耐えるように蹲っている。それを見た椛が、更にまくし立て始めた。

「何も言えないか。そうだろうな、あれだけの威力を近距離で受けたからな。素直に避けていればそうはならなかったのに。まぁいい、これは勉強料として心に刻め。そして二度と天魔様の直属などとのたまうな。分かったならさっさと――」

言い終わる直前、駒次郎さんの手が椛に向かって何かを放り投げた。私の目にも見えない程小さなものだった。油断した椛の隙を突いたいい攻めだったが、呆気なく椛の盾に受け切られた。

「……さっきから黙って聞いてみれば、ベラベラベラベラベラベラと、よくもまぁそこまで舌が回るもんだな。これが戦場ならお前は死んでたぞ？」

そのまま駒次郎さんはヒョイと立ち上がった。まるで何事もなかった様に、ごく軽い感じで。

「なっ……どう言う事だ！　太刀筋は確かに急所を捉えた筈！」

それに驚いた椛が、叫ぶ様に声を上げた。

「あぁ、当たったよ。強烈なもんが思いっきり身体にな。正直言ってまだ痛い。気を抜いたらぶっ倒れそうな位さ。確かにこれは高い勉強代だ。けど、それに見合った見返りは充分あったがな」

言うなり、駒次郎さんは着物をはだけさせて腹部を曝け出した。赤々と腫れ上がった線が、お腹から脇にかけて斜めに斬り裂かれた様に浮かび上がっている。見れば見る程

痛々しい痕だが、よく見ると通る筈だった太刀筋よりもわずかに下にずれている。

そこまで来て、ハッと悟った。

駒次郎さんは、椛の太刀筋を見極めるために、真っ正面からわざと攻撃を受けたのだ。本来ならば致命傷コースの斬撃を受けてずらし、ぬらりひょんが持つ耐久力と合わせてその後の対応を確実なものにするために受けたのだ。

理論的にこれを思いついても、実戦で試みようと思う者はそうそういない。駒次郎さんだからこそできる芸当と言ったところだろうか。

「ともあれ、これで情報は揃った。お前の行動、太刀筋、威力、弱点、クセ……ほぼ全てが俺の手中だ。もうお前は俺には敵わない」

「よく言えたものだ！　追い詰められているのは始末屋、お前の方だと何故気付かない！」

再び椛が語気荒く噛み付くも、駒次郎さんは動じない。既に苦悶の表情は消え、余裕のある表情が見え始めている。

「まぁそうだな。一撃貰っちまったのは変わらないし、急所は避けたとは言え、この傷は普通に動くことが出来ない代物だ。お前の言う通り、追い詰められているのは変わらない。だから……」

不意に駒次郎さんは、道場の後ろまで下がり、驚くべきことを口にした。

「宣言しよう。俺はここから一歩も動かない。一歩でも動いたら俺の負けでいい。このままでも俺はお前に勝ってやる」

耳を疑った。動かずして椛に勝つなんて、余程のことがない限り不可能に近い。

「……舐めるなよ始末屋！　どこまで私を愚弄する気だ！」

「愚弄？　勘違いするな。確かに仕事は面倒だと常々思っているが、俺は今まで相手を舐めた事は一度だってない。それとも何か？　お前は手負いの相手にすら情けをかける甘ちゃんなのか？　所謂武士道ってやつか？　そんなんじゃいつまで経ってもお前は俺に勝てないよ」

「巫山戯るな！　いいだろう、もう容赦はしない。その言葉を使った事を今すぐ後悔させて――」

「まぁ、そんな口を叩くのは俺の仲間を倒してから言うんだな」

「何？」

瞬間、椛の盾から光が放たれ、何かがそこから飛び出して来た。

「ぐっ……!?」

反動により椛の身体が後方に吹っ飛んだが、飛び出して来た何かはそんな事など御構い無しで、悠々とその場に着地した。

飛び出して来たのは、白い忍び装束を見にまとった一人の忍者だった。少し小振りな木の直刀を携え、無機質で冷えた目を、それでも爛々と輝かせて椛の方に向けている。

「だ……誰だ！　一体……一体どうやって現れた！」

椛が尋ねても、その忍者は何も答えない。まるで命令されるのを待っているかのように佇んでいる。

椛が動揺する最中、駒次郎さんはその忍者に向かって指を向け、指示を仰ぐようにそっと告げた。

「第一の指令だ『キングを守れ』」

――――――――――――――――――――――――――――――

僕は今日、殺される。

薄暗く、何もない部屋に通された時、そう確信した。奴らは僕の能力の事を熟知している。この部屋では、僕は自分の力を充分に発揮出来ない。よくて逃げるだけが精一杯だろう。

何よりも不気味なのが、目の前にいる中華服の――男……であろうか――だった。

見るからに毒々しく、くすんだ黄色の長髪を持つそいつは、ただでさえ細い糸目を更に細くさせ、獲物を見定めるように此方を見つめている。何度も修羅場をくぐって来た僕なら分かる。こいつは手練れだ。それも、僕では歯が立たない位強い。

「……初めまして、ルオシャと申します」

男にしては嫌にハスキーな声で、そいつが挨拶をした。

「単刀直入に聞きましょう。今日、何故ここに呼ばれたか、その理由は……貴方ならお分かりでしょう？　白狼天狗第四部隊隊長、孤狼の朱百殿」

「……昨日起こった、椿鬼組組長である華山椿殺害事件および、それによって生じた損失について……でしょうか」

「流石隊長。私が何か言わなくても、貴方なら分かってくれると思っていましたわ」

嬉しそうに笑うルオシャ。一見すると無害そうだが、この手の輩は一番厄介だ。どう転ぶか分かったものではない。

「そうよねぇ、分からない筈がないものねぇ。だって、今朝死体の処理に向かっていましたもの。私、見ていましたよ」

鼻歌でも歌うように、呑気な声で奴は言う。

「ボスがとても残念がっていましたよ？　あそこは絶好の狩場じゃなかったのか、あいつが持ちかけてきた提案だが、それは儂を裏切るためだったのか。あいつは儂を騙したのか……って」

「まさか……そのような筈がございません。私はボスに忠誠を誓っております。裏切るなんてそんな……」

「分かる、分かるわぁ。予想外ですものね。あの場所は一部の天狗しか知らない絶景スポット。どこで漏れたかは分からないのも無理はないわねぇ。それに関しては何も言う事はないわ。後で私がそいつを始末すればいいだけですもの。ただ……」

瞬間、僕の背筋に嫌な汗が伝った。奴の目が妖しく見開かれた。

「責任はどうつけてくれるのかしら？　朱百隊長？」

妖艶とも取れるその視線から、目を背けられない。蛇に睨まれたカエルというのは、この事を言うのであろうか。

「さ……早急に新たな業者を探し出し、損失分の利益を出来る限り回収したいと――」

「そうじゃないわ、貴方自身の信頼回復について、どう落とし前をつけるかを聞いているの」

「それは……」

「そういえば、貴方付き合ってる娘がいたわね。にとりって言ったかしら。その娘をボスに差し出すって言うのはどうかしら?」

全身の毛が逆立つ感覚に襲われた。ボスは僕だけでなく、にとりまで手にかけるつもりなのか。

持っていた刀を抜き、ルオシャの首元に突き立てる。しかし、それすらも楽しむように、笑顔のまま両手を上げた。

「ちょっとちょっと、そんな怖い顔しなくてもいいじゃない。ほんの冗談よ」

嘘だ。気まぐれに見せかけて本当に実行する奴がいる事を僕は知っている。事実、さっき奴の目からは明らかな殺意が見えていた。

「にとりには手を出すな!　あの娘は関係ない!」

「分かってるわよそんな事。だからどうするかを聞いているの。この件は貴方が提案したものでしょう？　失敗した時の尻拭いは当然、考えてあるわよね？」

ダメだ、これ以上ここに居たら、にとりが確実に狙われる。僕はどうなっても構わない。けど、にとりだけは別だ。一か八かではあるが、もうここから逃げ出すしか……。

「……この期に及んで逃げる気？」

手を扉に伸ばした瞬間、ねっとりとした声が耳に絡みついた。

気がつくと目の前には不気味な笑顔のままのルオシャ。そして僕の足には奴の足が、僕の腕には奴の手が重ねられていた。

「虫が良すぎないかしら？　許して貰った上に見逃して貰おうなんて。そんな甘い事あるわけないでしょう？　貴方、そんなに死にたいの？」

動けない。腕と足を抑えられた上に、奴の殺気が強すぎて身がすくんでしまっている。一歩いや、僅かに身体が揺れただけでも僕は……。

恐怖に支配された唇をなんとか動かして、僕は弁明を始めた。

「申し訳ありません……に、にとりに何か危害が加えられると反射的に思い込んでしまいまして……も、勿論、責任はしっかりと負うつもりでおりますし、今後ボスからの御命令は、この朱百の身をもってして遂行します。だから……」

どうかあの娘にだけは何もしないで下さい。

恥も外聞もなく、頭を深く下げて懇願する。命乞いにも似た情けない僕の言葉を、ルオシャは黙って聞いていた。

そうして……。

「アッハッハッハッハッハッ！」

突然、奴が高らかに笑い始めた。今まで浮かべていなかった、柔らかな笑顔がそこにあった。

「そんな顔しないで頂戴よ。本当にあの娘には手を出したりしないし、何だったら後か

ら会わせてあげてもいいですわよ？」

「ほ……本当、ですか？」

「勿論。貴方の覚悟は充分伝わったわ。但し、今から与えられた仕事は最後まできちんと遂行すること。これを守る事が出来れば、にとりちゃんに会わせてあげるわよ」

良かった。少なくともにとりが殺される事は無くなった。最低限これだけでもいい、後は僕が任務をこなせば生きて帰る事が出来る。

「それで、その仕事というのは？」

僕がそう尋ねると、ルオシャが簡単に説明を始めた。

「ある人物を始末して欲しいと依頼してきた人がいるの。その人とタッグを組んで、そいつを始末してきて欲しいわ」

ルオシャから説明された仕事内容を聞いて、僕は再び安堵する。もっと理不尽な仕事を課せられると思っていたが、これなら能力をフル活用する事が出来る。ここで汚名を返上して、何とかボスからの信頼を回復させなければ。

「了解しました。一つお聴きしたいのですが、依頼人はどのような人でしょうか」

「そうねぇ……一つ上げるとするなら……」

怨みを抱えて既に死んでいる、という事かしら？

ルオシャの目に、再び妖艶な光が広がった。

――――――――――――――――

一度だけ、椛が負けたという話を聞いた事がある。

朱百隊長に挑んで負けたという噂だった。私自身も、朱百隊長の元へ突撃しては勝負を申し込む椛と、その度に断る隊長とのやりとりを何度か見てきている。私としては椛

が負けた事よりも、普段一人でいる事の多い隊長が、椛の勝負を受けた事が意外であったと記憶している。

決着は一瞬だったらしい。噂では、遠距離から一方的に打突をくらい、何が何だか分からないまま負けてしまったという話だった。当の椛に話を聞こうにも口をつぐんでしまうので、詳しい事は聞けなかったが、顔を赤くしていたところを見ると、その噂は真実に近いだろう。

そして今は……。

「くっ……！　このぉ！」

突如現れた謎の忍者に圧倒されていた。

盾も持たず、刀も小ぶりな筈なのに、攻撃は悉く躱され、弾かれる。刀さばきに特別なものはない筈なのに、椛は徐々に圧され始めている。

私自身も、あの椛がここまで追い詰められるとは思っても見なかった。こんな一方的な展開は、全くの予想外だった。

「ほ～れほ～れ。足元がお留守だぞ～？」

「ぐぁ……！」

私がそんな事を考えている間にも、駒次郎さんが追撃でクナイを撃ち込み、椛に更なる追い討ちをかけていく。

忍者だけではない。弓を持った作務衣の僧侶、薙刀を持った騎兵、山のように大きな歩兵……誰もかれも、何もない所からいきなり現れては淡々と攻撃を繰り返し、椛を翻弄し続けている。

腕前以上に、私は彼らがどこから来ているのかが気になった。結界を張ってある以上、外部から人が入ってくる事は有り得ないのに、一体どうやって……。

「何が何だか分からない、と言った顔をしていますね」

すると、今まで黙って見ていた天魔様が口を開いた。

「そんなに難しく考えないで。よく見ていればすぐに分かる筈ですよ」

よく見ていれば。

その言葉を頼りに、私は記憶を遡る。

そういえば、あの忍者が現れたのは椛の盾からだった。その前に駒次郎さんが何かを投げていたところを見ると、物を介して召喚してきたと考えていい。

では何を媒介に？　今日初めて会ったばかりだが、それらしいものを見た覚えはない。持っていたとしてもチェスの駒程度だったが……まさか。

「もしかして、あの忍者や騎兵は駒次郎さんのチェス駒ですか？」

答えを聞いた天魔様が、「はい、その通りです」笑顔で答えた。

「駒次郎の能力は、持っているチェスの駒に命を吹き込み、自分の手足のように操る能力です。彼らはクナイや線等で陣を敷いた場所から出陣し、駒次郎の意のままに命令や行動を遂行します」

あれを見てください。と天魔様が椛の盾を指をさす。刺さっているクナイは四角く区切られており、中央にはポーンの駒が鎮座している。それだけではない、バラバラに

刺さったように見えた数百本のクナイも規則正しい四角形を作り、同じように駒が置かれていた。

確かにこれは便利だ。攻撃と同時に布石を作るだけでなく、数的優位を確保する事が出来る。これを一手で行えるのは相当強い。

「あっ……!?」

ちょうどその時、死角から矢が放たれ、椛の足に突き当たった。先端がゴムで保護されているとはいえ、その速度は普通の矢と変わりはない。あっという間に体勢を崩し、忍者の木刀に吹き飛ばされた。

これだけではまだ終わらなかった。すぐさま立ち上がり、反撃を加えようとした所で、薙刀の一撃が斜め後ろから加えられる。向かい打とうとした所で、巨漢の歩兵に阻まれる。その間に、負傷していた忍者を僧侶が治療する。

目まぐるしく戦況が変化する中で、各々がきっちりと役割を全うしていた。

「駒にはそれぞれ役割があります。例えば、あの忍者はポーンですが、白は白兵戦、黒は密偵を任されています。馬に乗り、薙刀を振り回しているのはナイトであり、撹乱と急

襲、戦場の斬り込みの役割を与えられています」

「……という事は、あの大きな歩兵はルークで、他の駒や駒次郎さんの護衛、あの僧侶はビショップで、負傷者の治療と弓矢による狙撃がそれぞれの役割でしょうか？」

「その通り。この強力な連帯感と、明確な役割分担が、彼らの大きな特徴です。ここに駒次郎の指揮能力や相手のデータが加わる事で、一分の隙もなく相手を追い詰める事が可能となります。更に、出陣は駒次郎の命令次第であるため、やり方によっては確実に死角を突くことも出来ます」

　椛が言っていたあの噂は、紛れも無い真実だった。実際に忍者や騎兵を指揮し、獲物を確実に追い詰めていく。そこにこの数時間の姿はなく、あるのは始末屋としての冷徹な目と、指揮官としての冷静な思考を兼ね備えた、王の姿そのものだった。

「勿論、彼らにも弱点はあります。幽体や飛行する敵には対抗策が殆どない事と、遠すぎると指揮が届かない事。後は……」

言葉を続けようとしたところで椛が大きな声をあげた。見ると、あの忍者を横から斬り捨て、仕留めたらしかった。

すぐに他の駒が反撃すると思われたが、ルークも、ビショップも、果てはナイトですら、動く気配がない。

「……駒の動きがそのまま投影されるため、あのように範囲外の出来事には全くの無力だと言う事です」

言われて気づいた。今椛が立っている場所は、ルークやビショップの攻撃が通る場所ではなく、ナイトの通り道でもない完全なフリースペース。しかも、ポーンは例外はあれど真っ直ぐにしか移動出来ないため、反撃する事も出来ない。

恐らく椛が必死に足掻いた末の偶然の産物だろうが、彼女はこの一手で自信をつけたらしく、目には明らかな高揚が宿っていた。

「はぁ……はぁ……やっとだ。やっとお前を仕留められる！　覚悟しろ！　その余裕そうな態度を今崩してやる！」

刀を突きつけ、高らかに宣言する。駒次郎さんはそんな椛を一瞥すると、「撤退しろ」と、小さく呟いた。倒れた忍者が欠けたポーンに変わり、駒次郎さんの手に戻っていく。

「うーん……こりゃ俺の応急処置だけじゃ間に合わなさそうかな？　いや、ビショップ四人がかりならなんとか……」

それでも尚、余裕な気構えを取る駒次郎さんに、ついに椛は爆発した。

「この……無視をするな！　貴様はどれだけ馬鹿にすれば気がすむのだ！」

「……じゃあかかって来いよ」

「何？」

「勝てる算段がついたんだろ？　なら自信を持って斬り込んで来いよ。尤も、始末屋相手に不用意に近づくけばどうなるかは、頭のいい椛ちゃんなら分かる筈だけどな」

そうだ、能力のせいで忘れていたが、駒次郎さんは始末屋。事前にこの道場の何処かに罠が張っておいた確率は高い。また、体や服の至る所に武器を仕込んでいる事も考えられる。接近戦は圧倒的に椛優位とはいえ、下手に突っ込んだら返り討ちに遭う可能性は高い。

しかし、高揚と怒りに心が奪われた椛に、そんな思考を巡らす心的余裕は持ち合わせてなかった。

「上等だ！　その挑発、私にした事を後悔させてやる！」

椛が突っ込んだ。チェス盤を無視した直線距離から駒次郎さんを狙う。

それを見た駒次郎さんは、はぁ、と溜息を吐き、右手を大きく振りかぶった。

矢張り遠距離武器を隠し持っていたか。あの構え方から察するに、鉤縄か鎖分銅、或いは目潰し用の何かだろう。これで動きを封じるつもりか。

「甘い！」

その瞬間、椛は予期したように進路を左に曲げ、真っ正面から駒次郎さんに斬りか

かった。
　完全に虚を突かれたのか、ここまで表情を崩さなかった駒次郎さんの顔が驚きに染まる。無理もない。あれだけ逆上していれば、そのまま突撃してくるかと考えるのは自然の事。僅かでも彼女が冷静な判断を残していたのは全くの想定外だろう。
　姿勢は既に攻撃の体勢。椛のスピードと剣さばきを考えれば、向きを変える間にやられてしまう。
　要するに王手詰み。あれだけ有利だった状況が、一転して絶望的なものに変わってしまったのだ。
「思った通りだ！　暗器の類はあるだろうと踏んで敢えて突っ込んで誘ったんだ！　最後の油断が仇となったな始末屋！　この勝負、私の勝ちだ！　後悔しながら敗北しろぉおおお！」
　駒次郎さんの体が椛の間合いに入った。神速の刀が振り上げられる――。

彼は兎角、トラブルに巻き込まれる

「……え？」

刹那に放たれた矢に、木刀が弾かれた。同時に彼女の頭と体に三発、同じものが撃ち込まれる。

意識外。それも、対応がしにくい斜め後ろからの、あまりにも速く、無慈悲な射撃。

なす術もなく椛の体は駒次郎さんの横に逸れ、そのまま倒れ込んだ。

「……なんてな」

再び余裕そうな表情を浮かべた駒次郎さんが、誰にともなくそう呟いた。

「ど……どういう事だ……お前は……」

「そうだよ。椛の言う通り、俺は仕事の時に隠し武器を使う事もある。だが残念だった

な。生憎今日は仕込んでない」

「それじゃああの構えは……」

「あぁ、あれはブラフだよ。あれも俺の作戦の一つ。お前はそれに引っかかっただけだ……感想戦でもしようか？」

「巫山戯るな！　私はまだ負けてなど――」

「あっそ、じゃあいいや。なら……」

駒次郎さんは椛の方へ座り込むと、何の躊躇いもなく彼女の喉元にクナイを突きつけた。

「まだやる？　言っとくけど、もう周りは囲ったから」

軽く言い放ったと同時に、二体のルーク兵が現れた。持っている刀は木刀などではな

く、その巨体に見合った鈍色に輝く本物の大太刀。逃げようとすれば確実に刀の錆になるだろう。

「まぁ個人的には、このまま降参して欲しい所ではあるね。どうしようと勝手だけどさ」

「うっ……ぐうぅぅぅぅぅぅぅっ……！　わ、私の……負けだ……！」

任務完了、と駒次郎さんが呟いた。余裕そうな表情から、気怠そうな表情に切り替わる。同時に、今まで散っていたチェス駒の兵達が、次々と駒次郎さんの手元に戻っていった。

「よし、みんな戻って来たな。それじゃあ俺は帰る。後片付けは――」

「ちょっと待って下さい」

そのままゆらゆらと体を揺らしながら帰ろうとする駒次郎さんを、私は思わず呼び止めた。

「あの……どうして椛が進路を変えてくると分かったんですか？　あまりに突然の事だったので、私には何がなんだかさっぱりで……」

「だから教えて欲しいってか。面倒くせぇなぁ……けどまぁ、後でどやされるよりマシか」

他言すんなよと駒次郎さんは釘を刺し、私達の方に向き直りって今までの事について説明を始めた。

「順を追って話をするぞ。まず、元々の作戦は結構シンプルだった。ひたすら煽って冷静さを忘れさせてから、突っ込んで来た所を返り討ちにする。謂わばカウンター戦法だな。ナイトやポーンを使って撹乱して、それをルークで守りながらビショップで射る。予想通り、作戦は上手くハマった。だが……一つ、問題が起こった」

「問題？」

「ちょっとばかり決定打に欠けていたんだ。正確には、『降参』と言わせる程の力がなかった。スピードは椛の方が上だったから、動かれたら駒数での圧倒も難しい。このまま消耗戦に持ち込んでも良かったが、ポーンが倒された所でそれも厳しいと分かった」

「それじゃあもう詰みじゃないですか」

「まぁ落ち着け。どちらにしろ、この時点で俺は戦法を変える気はなかった。効果的だったのは事実だし、急ごしらえの作戦をやった所で失敗するのは目に見えてるからな。じゃあどうするか？　確実に勝てると相手に勘違いさせればいい」

勝てると勘違いさせる？　一体、どういう事だろうか。

「今度は椛側の視点に立って考えてみるぞ。始まってから今まで、あれだけ煽られて圧倒されて、正常な判断が出来ない状況の中、漸く掴み取った勝利への糸口。射命丸、お前ならどうする？」

「えっと……興奮して、後先考えずに突っ込むと思います」

「だろうな。先に周りの駒を倒す、なんて事もあるかもしれないが、概ねそう言った心理になる事は確かだ。そして、攻めて来る俺が始末屋である事を再認識させれば、必然的に他の武器や罠も意識するようになる。じゃあもう一つ、そんな状態でこちらに向かってきた場合、その進路は一体どうなると思う？」

「そりゃあ、左右のどちらかから……あっ」

そこまで来て、ニヤリと駒次郎さんが笑った。

「そう、武器を持っていると考えるならば、正面から突っ切ってくる事は殆ど有り得ない。頭に血が登っているなら尚のことだ。この段階で既に進路はその二択に絞られる。しかも、あれだけ挑発させられれば、相手の策に乗った上で潰したいという欲も出てくる。後は簡単。来るであろう二つの進路に駒を置いて、露骨に武器を持ってますとアピールすればいい。予想通り、相手は自分が勝ったと勘違いして、俺の計算通りの進路を辿った」

そんな奴なんざ恰好の的さ。と、駒次郎さんはあっけらかんと言い放った。

全てはこの人の手の中だった。多分、初めて椛と出会った時からその性格を見抜いていて、それをしっかりと戦略に組み込んだ上で不測の事態にも対応出来るように手を打っていたのだ。

この勝負、完全に駒次郎さんの勝ちだ。

「お見事です駒次郎。流石私の息子なだけあります」

「よせ、鞍馬天狗。褒めたって何も出やしねぇよ……それじゃあ俺は――」

「待てっ！」

再び駒次郎さんが帰ろうとした時、椛が大きな声で呼び止めた。

「今の勝負……物言いだ。お前は自分の力で勝ってなどいない！　もう一度、今度は一対一で私と勝負しろ！」

悔しさに顔を染めた椛が突きつけたのは、再戦の申し込み。それを一蹴するかのように、駒次郎さんは口をへの字に曲げて「嫌だ。断る」と拒否した。

「あのな、始める前に鞍馬天狗が言ったよな？　『大きな怪我させる以外は何でもあり』って。俺はそれに則って矢もゴムで保護したし、真剣じゃなくて木刀を使った。後は能力使おうが仲間呼ぼうが御構い無しだ。お前もそれは折り込み済みな筈だろ？」

「ぐっ……確かにそうだ……だが！　少し理不尽すぎではないか!?　あれではあまりに……！」

「――死人に口なし」

瞬間、あれだけ緩みきった駒次郎さんの雰囲気が、一気に張り詰めたものに変わった。

「死んだ奴は、何も言わない。自分が死んだ理由も、それに対する後悔も、憤りも、禍根も、悲しみも、何も言わない。勿論、もう一度戦えというワガママも言わない。これは今みたいな試合でも、同じ事が言えると俺は思っている」

「だからどうしたと――」

「まだ分からないのか？　普通だったら、お前はもう矢に射抜かれて死んでいる状態なんだよ。それを何だ？　自分の理不尽な負け方に納得がいかないからってもう一回勝負しろだと？　死は絶対だ。死んだ奴はそんな事言わないし、少なくとも今、この場で言うべきではない」

刹那、駒次郎さんがクナイを放った。さっきまでの倍くらいはある速さのそれが、椛の頬を掠め、壁に深々と突き刺さる。

「これでトドメだ。俺は帰って寝る。鞍馬天狗、後処理は頼んだ」

冷たく言い放ち、再び駒次郎さんはゆらゆらと歩き始め、入り口に貼っておいたお札を剥がして道場から出ていった。

「くそっ……私は……！」

「椛、そう辛そうな顔をしないで。貴女もよく頑張りました。これを糧に、より一層の研鑽に励んでください」

天魔様が椛を慰める中、私は駒次郎さんが去った後の道場の入口を呆然と見つめいた。

◆

川のせせらぎが耳に届く。鳥のさえずりが、何処が遠くで聞こえてくる。

緑と水の気配を心地よく感じる中で、パチンと音を立てて飛車が歩兵を取った。

「……なるほどねぇ。相手のズルで負けて、しかも再戦すら受け付けてくれなかったか

らそんな怒ってたんだ」

取ったばかりの歩兵を手でもてあそびながら、にとりは軽い調子でそう言った。

「あぁ、今思い出してもイライラする。あんな奴に負けたなんて屈辱的だ」

合わせるように桂馬で飛車を取る。取られたにとりは、少し顔をしかめつつ、顎に手を当てて考え始めた。

「まぁでも、私は分かっちゃうな。その人の言い分も」

「何だと、まさかにとりまで一対一の決闘を愚弄する気なのか？」

「落ち着きなよ。確かに予めルールが決められていて、その中でズルをしたなら悪いのはその人だよ。だけど、天魔様はなにも言ってないんでしょ？　その状況で椛と戦うなら、私は自作の武器をいくつか持ってきて、怪我をさせない範囲で思いっきり使うね。そうじゃなきゃ私が負けちゃうもん」

「しかしだな――」

「もー、椛は相変わらず固いんだよ。もっと柔軟に考えないとまた足元掬われるよ？」

こんな風にね。と、椛は玉の左に金将を置き、王手と高らかに宣言する。慌てて駒を動かそうとしたが時すでに遅く、逃げ道は全て塞がれてしまっていた。

「うっ……まさかあの飛車は……」

「桂馬を開かせるために決まってんじゃん。あれで金将を置ける隙が出来た。目先の飛車に囚われて脇の銀将に気づかないなんて椛らしいっちゃ椛らしいけど、こう言う事に気を付けるようになれば勝てるんじゃないかな？」

「ぬぅ……これは……」

「諦めなよ。今日は私の勝ちで決まりなんだから」

勝ち誇るにとり。どうしようかと思案していると、玄関の扉を叩く音が聞こえた。

「はーい！　椛、ちょっと出てくるね」

言い残して、にとりは玄関に向う。

……駄目だ。どう考えてもここから逆転出来る一手が思い浮かばない。

投了が頭をよぎった時、玄関からにとりの声が聞こえた。

「やぁ、旦那じゃないか！　随分ご無沙汰だったねぇ！　今日はどうしたんだい？」

「あぁ、まぁな。ちょっと野暮用でクナイの仕入れを頼みた――」

どうやら来客は男性らしかったが、不自然な言葉の切り方に違和感を覚えた。

振り返って見ると、白黒の市松模様の着物を着た細身の男が顔を苦くしてこちらを見つめている。

今私が一番会いたくない相手だと理解するには、数秒もいらなかった。

「お前は――！」

言い切る刹那、私の腕をクナイが掠めた。にとりからは死角になる場所からクナイを放った始末屋が、余計な事は言うなと鬼の形相で釘を刺していた。

「あれ？　どしたの駒次郎の旦那。そんな鬼気迫る表情しちゃってさ」

「いや……なんでもねぇ。それより、クナイを百本仕入れたいんだが頼めるか？　ついでにポーンの修理もお願いしたい」

「ふーむ……分かった。その量ならきゅうり一箱と五万円だね。今出すから中に入って待っててくれるかい？　お茶も出すからさ」

始末屋が差し出した袋を受け取り、中身を確認したにとりが、奴を中へ案内する。ちょっと待っててねと私に断った後、そのままにとりは工房へ入り、入れ違うように始末屋が少し遠い位置にどっかりと腰を下ろした。

「……おい、何故貴様がここに来る」

「ここに俺が来ちゃいけねぇってのか？　とんだ職業差別だな」

刺すような私のささやきにも、奴はカラカラと笑って相手にしない。まるで柳相手に刀を振り回しているようで、先の事と合わせてより一層不機嫌になる。

「身を隠すのと実益を兼ねて武器を売ってんのさ。ほれ、こんななりだし、妖力も少ないから簡単に人里に入り込めるだろ？　余ったクナイは自分で使えるし、一石二鳥ってわけ」

「ならばここでなくてもいいだろう。何処か別の所へ行け」

「ま、そう言うな。にとりの腕は確かだし、武器自体もかなり安めに取引してもらってる。そのかわりに本来の買値にプラスしてきゅうりの納入という話で手は打ってあるんだ。多少財布は痛むがまぁ、のらくら生きるためには必要な犠牲ってやつだ」

言い終えた始末屋は、くぁー、と大きく欠伸をした。全くもって呑気な奴だ。

「やーお待たせ。先に注文のクナイ百本ね」

タイミングよくにとりが現れ、ある程度大きさのあるダンボールを一箱始末屋の前に置いた。中に入った黒金の武器を、始末屋は一本一本丁寧に検分していく。

「うん、確かに受け取った。これは先払いの五万だ」

「毎度あり！　あ、ポーンに関してはちょっと時間が欲しいな。細かい作業が結構多いし」

「んじゃ、きゅうりは後から持ってくる。世話になったな。後は頼むよ」

気楽な感じでにとりとやり取りし、奴はそのままゆらゆらと小屋から出て行った。

あの時、私に見せた隙がない気配と違う、緩みっぱなしのだらけた気配。

こんな奴に負けたのかと思ったら、自分の力不足に苛立って。
気がついたら、にとりの存在を忘れ、私は外に出て「待て！」と大きな声で叫んでいた。

「……もう一度だ。私ともう一度勝負しろ！」

振り返った奴に向かって再び宣戦布告をするも、奴は嫌そうな顔をして一言「やだ」と斬り捨てる。

「頼む！　あのままじゃ私にとって生殺しもいいところだ！　一戦だけでいい！」

「断る。俺は今オフだ。プライベートで予定外な事はしない主義でね。文句があるなら依頼してから来な」

「じゃあ今、この場で依頼する！　どうか私と戦ってくれ！　報酬も出す！」

「あのなぁ……仮にお前が休みだったとして、急に仕事を頼まれたら嫌だろ？　今俺に

してんのはそういうことなんだぞ」

「だが……！」

「もー、いーじゃないですかぁ。駒次郎さん」

ふと、聞き慣れた声が上空から降ってくる。

上を見ると、見慣れた一本下駄を履いた私の上司が、ふわりとこちらに降りてきた。

「おい、射命丸。お前どうしてここが分かった」

「それは企業秘密です。そんなことより、折角私の可愛い後輩が頼み込んでるんですよー？　ここは受けてあげるのが、男としての筋って奴じゃありませんか？」

「あのな、どこから聞いていたのかは知らんが、何を言われてもこいつと勝負する気はないぞ」

「あややー、それじゃあ仕方ありませんねぇ。それじゃあ……」

依頼として天魔様に持って行くしかないですよ。

これを聞いた瞬間、始末屋の顔色が一気に変わった。

「なっ!?　ちょっと待て！　お前確か、鞍馬の野郎に口止めされてたんじゃ……」

「確かに新聞は止められましたよ。けど、今日天魔様から直々に貴方のお目付役を頼まれたのですよ。可愛い息子をよろしく頼むって！」

「あんの馬鹿天狗……！」

苦々しく歯をくいしばる始末屋を尻目に、文さんは清々しい笑顔で更に追い詰めて行く。

「おっと、私にそんな事言っていいんですかー？　天魔様に報告しちゃいますよー？」

「それとこれとは話が……！」

「もーみじー、天魔様の所に行きましょうか」

「あああああああ！　分かった！　やるよ！　やりゃあいいんだろ!?」

とうとう奴は脅しに屈した。がっくりと肩を落とす始末屋に同情しつつ、私は申し訳ないと文さんに頭を下げる。

「いいんですよー。そ・の・か・わ・り、また部隊にお邪魔させて下さいね！」

……結局、文さんの一人勝ちで終わったのは少し悔しいが。

「……ったく。ただし、条件がある。俺と戦いたかったら、まずこいつらのどちらかに勝ってからだ」

始末屋はそう言うと、地面に正方形を二マス書き、その中央に黒と白の大きなチェス

駒を置いた。たちまちのうちに光が放たれ、マスの中に人影が現れる。
白い駒が置かれた方には、真っ白い鎧を身に着けてた男がかしずいていた。月のような形の兜を被り、そこから銀に輝く長髪がのぞいている。
かたや黒い駒が置かれた方には、黒金に艶めく鎧を身に着けた男が、白い男と同じようにかしずいていた。今度は鬼の角のような兜を被っている。髪は見えないが、短い黒髪である事は間違いないだろう。

「お呼びでございましょうか。ご主人」

かしずいたまま、二人は同時に尋ねる。当の始末屋は「おう」と軽く挨拶し、顔を上げさせた。

「白金（しろがね）、黒金（くろがね）、命令だ。お前らのうちどちらかが、そこのちんちくりんの相手をしろ」

親指で乱雑に指されたことにムッとしながらも、私は二人に会釈をする。
先に反応したのは、白い鎧の男だった。私に目を向けるやいなや、すぐに近づき、片膝をついて――

「おぉ、麗しのレディ。貴方が私のお相手ですか」

私の手を取り、キスをした。

「……へ……？」

あまりにも自然、かつ突然の出来事に頭が追いつかない。だが、男は気づかないのか尚も私に話しかけてくる。

「あぁレディよ、そんな驚いた顔も素敵だけど、やはり貴女はそのままの方がもっと素敵だ。白い髪に透き通る手、何よりもその小さな耳。何処を取っても最高だ。だがどうだろう？　私はこの美しくも可愛らしい娘と戦わねばならないのか。運命はなんと残酷なのだろう？　いやしかし、こんな宿命、私の手で断ち切ってみせよう。いや、見せなければならぬのだ。レディ、私と逃げましょう。そう、幸せというエリュシオンに……」

「はぁ……あっ、えっと……」

「けっ、まーた始まったか」

逡巡していると、今度は黒いほうが口を開いた。

「おい白金、おめーの女癖の悪さには飽き飽きしてんだ。いい加減に女と目ぇ合わせたら口説こうとするのをやめろ」

「何ですか、もてない男の僻みですか。みっともないですよ黒金。分かったらどこかに行ってください」

「ちげぇよバーカ。毎度毎度懲りないなと呆れてんだよ」

「はい？」

「あぁ？」

「おーしテメェら、そこまでだ」

始末屋はそういうと、ゴンッと兜越しに拳骨をお見舞いした。余程強い力だったのか二人とも兜を抑えて悶えている。

「全く、隙を見せりゃ喧嘩しかしねぇなおめぇら。いい加減仲良く出来ねぇのか」

「申し訳ありませんご主人……」

「め、面目ねぇ……」

しゅんと項垂れる二人の武将を「まぁいいやと」ひらひら手を振って制し、「で、どっちがやんの？」と更に続ける。

「も、勿論この白金がやらせていただきます！」

「馬鹿、おめーに任せたらどうなるか分かったもんじゃねー。ここは俺が……」

「貴方みたいな堅物がやっても彼女のためになりません。ここは私が手取り足取り……」

やいのやいのとやっているうちに、二人はまた取っ組み合いの喧嘩になった。その様子を、ポカンとして見つめる文さんと私、カカカと笑って「しょうがねぇ奴らだなー」と嘯く始末屋が対象的だった。

「……あのー、駒次郎さん？　この人達は一体……」

戸惑いながら文さんが尋ねると、始末屋は何事もないように答えていく。

「この二人はクイーン。チェス駒の中でも最強の駒で、白駒と黒駒の率いている俺の軍師だ。白い奴は白金。今見たように女癖が悪い。そっちの黒い方は黒金。斜に構えた皮肉屋で、二人とも馬が合わねぇのかしょっちゅう喧嘩してるんだわ」

はっはっはっと他人事のように始末屋は笑う。

「……ふん、そんな奴に私が負けるはずが……」

「おっと、甘く見ない方がいい。二人とも相当強いからな。有事の際には頼りになるぜ？」

今のオメーにゃ丁度いい相手だろと始末屋が煽るが、これも奴のペースであるという事は先の手合わせで分かっている。そう簡単に乗せられないようにしなければ。

「で、オメーはどっちとやるんだい？」

再度始末屋が問いかける。

私は少し考えて、喧嘩している二人の武将の一人に声をかけた。

「黒金様！　どうか私と勝負していただきたい！」

途端、ピタリと喧嘩が止み、二人とも私の方を見つめた。黒い武将はニンマリとした

顔で、白い武将はショックを受けた顔をして。

「な……何故なのですかレディ！　私では不服と申されるのですか!?」

今にも泣きそうな子供の目を向けながら抗議する白金様に対して、私ははっきりと言った。

「確かに、貴方も十分にお強い事は理解しているつもりです。ですが、私は本気で始末屋と戦いたい！　そんな時、もしも手を抜かれて貴方に勝ったら、私の面目は立ちません！　ですので、少なくとも全力で戦ってくれるであろう黒金様を選びます！」

「そんな……」

「ははははは！　色男が聞いて呆れるなぁ！　気に入ったぜ小娘。いいだろう、乗った！」

豪快な笑い声を上げながらこちらに近づいてくる黒金様を、私は目線を逸らす事なく

見つめた。私より幾ばくも高い背丈から、黒い武将が私を見下ろす。

「言っておくがな、この前の事は全部ご主人から聞いている。俺は木刀なんて甘っちょろい事は言わない。来るなら真剣だ。全力で来い。分かったな？」

「言われなくとも！」

「よーし分かってんな。だったら……」

今からスタートだ！

そう言わんや、黒金様は刀を抜き、即座に振り下ろす。「おい！」と言う始末屋の声すらも置き去りに、私もまた合わせて刀を抜いて受け止める。

「ぐっ……これは……！」

重い！　刀の一撃がこんなに重いのは朱百隊長の時以来だ！

だが！

「負けるかぁ！」

私は負けじと足に力を込め、黒金様の刀を弾いた。

ニヤリ、と黒金様が笑う。

「さぁ白狼天狗！　全力でぶつかってこぉい！」

そう吠える黒金様に同じように笑みを返し、そのまま彼に向かって突進した。